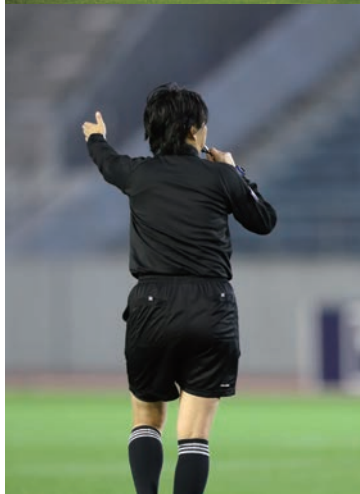




Your Life with Football

サッカー×キャリア×未来



※写真はすべて2019シーズンのものです

Introduction

皆さんに知ってもらいたい未来があります。

サッカー選手としての経験を最大限に生かせる未来を
私たちと一緒に探してみませんか。

20人の先輩たちの話に耳を傾けてみてください。

未来の選択肢を広げれば、自分自身の可能性もきっと広がります。

Your Life with Football.

あ い さ つ



公益財団法人 日本サッカー協会
女子委員会 委員長

今井純子

PROFILE

今井純子 (いまい じゅんこ) / 東京都板橋区出身。小学校の頃はサッカーと出会う環境がなく、中学校ではバスケットボール部に入部。中学・高校とバスケットボールを続ける中で、もっとしっかり取り組みたいと筑波大学へ。「勉強は勉強」と割り切って比較文化学類に入学するもスポーツへの関心が高まり、スポーツ諸科学にも集中する日々を送って大学院へ。特にアスレティックトレーナーとして学生組織の立ち上げに関わる等、積極的に活動。大学院では、誘われて入った筑波大学女子サッカークラブでサッカーに熱中し、その後は東京のクラブチーム、FC PAFへ。海外留学中も地元チームで楽しんだ。スポーツ関連の翻訳に携わる中、大学院でJFAとJリーグの寄附講座としてS級指導者養成講習会を実施することになり、主にその資料の翻訳等を手伝う。その間、JFAの指導者養成や育成などさまざまな取り組みをサポート。寄附講座の終了をもってJFA内に同機能を移管することになり、自身も2002年からJFAへ。技術委員会のサポートグループであるテクニカルハウスの一員として、女子に限らず強化・育成・指導者養成・普及の仕事を担当。同時にアジアサッカー連盟の女子委員会等、世界的女子サッカーの会議に参加する機会を得て大いに刺激を受ける。2016年にJFA女子委員長に就任。高いレベルでの競技経験はないものの、サッカーの発展に長く関わってきた経験と人脈を活用しようと考え、日々取り組んでいる。

サッカーを仕事にするきっかけ

私自身、子どもの頃に自分の地元でサッカーに出会うことはできませんでした。小学校の体育の授業でやって楽しかった印象は残っていますが、地元では男子も野球ばかりしており、一緒に野球を楽しんでいました。活発で動くことが好き、また、チームスポーツが好きだったので、中学では部活動の中からバスケットボールを選び、大学卒業まで打ち込みました。大学在学中に本誌でも登場する小林美由紀さんと八鍬美由紀さんが創設した女子サッカークラブに誘われ、そこからサッカーに熱中しました。とはいえ、同じチーム競技であるバスケットボールの感覚で楽しみつつも、早いうちから足でボールに触っていなかった私は、ボールを自在に扱うに至ることができず、後から日本サッカー協会(JFA)の指導者養成に関わる中で「ゴールデンエイジ」について知り、とても納得したものです。大学院に在籍していたとき、大学が寄附講座としてS級指導者養成講習会を5年間開催することとなり、女子サッカークラブに入ったことが縁でその手伝いをするようになりました。それが、私が今もサッカーを仕事にしているきっかけです。

多くの選択肢を持てほしい

女子サッカーに委員長として携わるようになり、もう一つ強く思っていたことは、もっともっとサッカーをしてきた人たち、女子サッカーの発展を願う皆さんに、その思いや経験を生かして女子サッカーやスポーツの発展に関わってもらいたいということでした。一方で、きっかけや方法をつかめていない人も多いように感じました。そんな中、イングランドサッカー協会が出した『Kick Off Your Career』を見て、「これだ!」と思い、同様のものを作りたいと考えました。今回、実現することができて大変うれしく思います。サッカーのフィールドに直接関わる指導者や審判員はもちろん、もっとたくさんの選択肢があるということをイメージしてもらえたらと思っています。

そして、選手としてはプレーに集中し、その時ならではの経験をたくさんしてほしい。本誌の意図は、早期からセカンドキャリアに備えよ、ということではありません。ここで紹介する皆さんの話からも分かるように、必ずしも早くから先々のことを考えて準備しなければいけないということでもありま



サッカーはとても楽しく、もっと早くサッカーに出合えていたら、身近にサッカーができる環境があったら、と強く思ったものです。だからこそ、全国どこにいても、女子サッカーが身近にある状態を、サッカーに出会い、続けることができる環境をつくりたい、という思いが強くなります。

せん。興味があるものがあれば取り組む、深く学ぶことも良いでしょう。あとは人の縁や人からの勧め、その時々直感も大切かもしれません。皆さんのサッカー経験は価値あるものであり、それは生涯にわたって役立つものです。いろいろな方向で生かしてほしいと思います。決めつける必要はありません。自分では思いもしなかった分野で活躍している先輩たちもいます。今回紹介しきれなかった事例もたくさんあります。

私自身、女子委員長に就任する前は「サッカーの経歴から見ても自分が最適任ではない。適任者がいたらその人を全力でサポートしよう」と考えていましたが、最終的に引き受けることになりました。自分の経緯を踏まえても、サッカーを高いレベルで経験してきた人たちの中から、女子サッカーやスポーツ界をけん引するような人がどんどん出てきてほしいと強く思っています。何らかのオファーを受けたら積極的に考えてみてください。

ぜひ一緒に女子サッカー、スポーツを発展させていきましょう!

サッカーと歩む

私にとってサッカーとの出会いは運命的だったと思います。小学3年生のとき、サッカー部の顧問をしていた担任の先生に誘われて始めました。休み時間に男子と一緒に走り回っていた私を見てサッカーに向いていると思ったらしいのですが、違うスポーツだったらサッカーはしていなかったかもしれません。小学6年生で優勝した全日本ジュニアボールリフティング大会で、チームメートと編み出した高速リフティングが注目され、当時は女の子がサッカーをすることがまだ珍しい時代でしたから合わせて話題を呼び、それをきっかけに読売サッカークラブ女子ベレーザに入団。週末に栃木から東京に通っていましたが、代表にも選ばれるようになり、もっとサッカーがしたいと高校からは親元を離れて上京しました。

現役引退は2度経験しています。1度目は大学4年生のときです。第1回FIFA女子ワールドカップが開催されることになり、そこを目標にプレーしていたので出場できたときは「これで一区切りだ」と考え、引退を決意しました。

選手の経験を社会に生かす

本田美登里さんや本誌で登場する高倉麻子さんをはじめ、日本で女子サッカーが認知されていなかった時代を共に生きた人たちは、「大好きな女子サッカーをもっと認めてもらいたい」という思いでプレーし、今も同じ気持ちでサッカーに携わっているように思います。サッカーが好きな気持ち、そして、サッカー選手としての経験は、日本サッカーや日本スポーツの発展を支える大きな力になります。サッカー選手の明るさやひたむきさは、社会を明るくすると私は考えています。

私が伝えたいことは、選手をやめた後も何かしらの形でサッカーやスポーツに関わってほしいということ。日本は男子と比べて女子の競技人口が少なく、サッカーをしている女性はとても貴重な存在です。今回紹介する20人の事例以外にも、サッカーやスポーツへの関わり方はさまざまです。誰かに背中を押されてその道で活躍できる人がいたり、自分の意志で未来を切り開いていく人がいたり。本誌を読んで、皆さんのこれからの生きる道のヒントになればうれしく思います。

そして、これまでの経験を生かそうと、地元で高校の教員となり男子サッカー部の指導をしていました。一方でベレーザの成績が低迷したこともあり、教員を約2年で辞めてプロ選手としてチームに復帰。迷いましたが、サッカーは好きでし、どこかに使命感みたいなものもあったと思います。そして、1999シーズンを最後に2度目の引退。その後は、当時、日本女子サッカーリーグの事務局に勤めていた本田美登里さん（元日本女子代表／現、静岡SSUアスレジーナ監督）に「今後サッカーに関わっていくのであれば、組織や事業のさまざまな仕組みを知っておくのもいいと思うよ」と勧められ、日本サッカー協会（JFA）の仕事などをするようになりました。



公益財団法人 日本サッカー協会
女子委員会 副委員長

手塚貴子

PROFILE

手塚貴子（てづか たかこ）／栃木県宇都宮市出身。小3から田原小サッカースポーツ少年団でサッカーを始め、小4・小6のときにベレ杯争奪全日本ジュニアボールリフティング大会で優勝。中1の途中から読売サッカークラブ女子ベレーザ（現、日テレ・東京ヴェルディベレーザ）に入団。15歳で日本女子代表に初選出。16歳で国際Aマッチ初出場。日本大学文理学部体育学科に進学し、1991年、大学3年生で第1回FIFA女子世界選手権大会（現、FIFA女子ワールドカップ）に出場。大学卒業と同時に現役を引退し、地元栃木の高校で教員となり、県内初となる女性の男子サッカー部顧問に。教員と選手を兼任後、教員を辞職し、ベレーザでプロ契約選手となる。29歳で現役を引退し、指導者の道へ。JFA派遣社員、ベレーザのサッカースクールコーチなどを歴任し、2003年に栃木でブランカサッカースクールを開設。同年にNPO法人ブランカを創設し、翌年、女子チーム・ブランカFCを立ち上げて監督に。2005年から各年代の日本女子代表コーチやJFAナショナルトレセンコーチを務める。2007年に栃木SCに入社し、ブランカFCを移行する形で栃木SCブランカ（現、栃木SCレディース）を創設。2016年、JFA女子委員会の副委員長に就任。2018年からJFA理事も務める。さらに栃木県的女子普及コーディネーターや女子技術委員長なども兼任。



高倉 麻子 TAKAKURA Asako

- ・サッカー指導者
- ・JFA ナショナルコーチングスタッフ

- ▶ ホームタウン
福島県福島市
- ▶ 最初のサッカークラブ
FC ジンナン(東京)

小学4年生のとき、いつも遊んでいた男の子たちがスポーツ少年団に入ったので、私も一緒に入部してサッカーを始めました。最初はそこまで興味がなかったのですがサッカーの面白さにどんどん引き込まれ、中学からは電車で東京のチームに通って続けていました。選手を経て指導者になった今も、サッカーを好きな気持ちは変わっていません。

轟 奈都子 TODOROKI Natsuko

- ・サッカー指導者(GK)
- ・JFA ナショナルトレセンコーチ

- ▶ ホームタウン
大阪府大東市
- ▶ 最初のサッカークラブ
交野FC(大阪)



「初めてにはしてはできるやん!」と言われたことが、私がゴールキーパー(GK)をするようになったきっかけです。小学生でGKというポジションに出会い、GKが好きでここまで続けてこれました。現役引退後のキャリアは明確にありませんでしたが、縁あってGKコーチとなり、選手時代のキャリアを指導にも生かすことができています。



宮本 ともみ MIYAMOTO Tomomi

- ・サッカー指導者
- ・JFA ナショナルコーチングスタッフ
- ・JFA 女子委員会委員

- ▶ ホームタウン
神奈川県相模原市
- ▶ 最初のサッカークラブ
新磯サッカー少年団(神奈川)

私は兄がやっていた影響でサッカーを始めました。中学・高校では相模原サッカークラブに所属して、高校では上を目指していたので男子サッカー一部で男子とも一緒に練習していました。現役時代、育児とサッカーの両立は大変でしたが、たくさんの人の支えで続けられました。今は、指導者としてもっと成長したいと思っています。

河本 菜穂子 KAWAMOTO Naoko

- ・サッカー指導者(海外)
- ・ROKUAI CLUB (ロクアイクラブ)コーチ

- ▶ ホームタウン
大阪府大阪市
- ▶ 最初のサッカークラブ
天王寺少年SCスポーツ少年団(大阪)



父がサッカー選手、母はサッカー部のマネジャーで、長女の私は生まれたときからボールを蹴っていました。中学ではサッカーをしたくても環境がなく、高校からクラブチームに入って本格的に始めました。指導者になり、JFAの研修会でモルディブの女性指導者と出会ったことを機に、私の活動の場は日本からアジアに広がりました。

私は小学低学年の頃、いつも男子と一緒に野球をして遊んでいたのですが、ある日、同級生の男子が持ってきたサッカーボールがとてもかっこ良く見えて、その日からサッカーに夢になりました。スペインではサッカーの最先端に触れられる場所に身を置くことができ、クラブと共に自分自身も成長していきたいと思っています。

佐伯 夕利子 SAEKI Yuriko

- ・サッカー指導者(海外)
- ・ビジャレアルCFフットボール総務部
- ・JFA 競技会委員会委員、女子委員会委員、将来構想委員会委員
- ・Jリーグ理事

- ▶ ホームタウン 福岡県福岡市
- ▶ 最初のサッカークラブ 長住少年サッカークラブ(福岡)



藤田 安澄 FUJITA Azumi

- ・フットサル指導者
- ・Atractivo Activity Club 代表理事
- ・JFA フットサル委員会委員

- ▶ ホームタウン 神奈川県茅ヶ崎市
- ▶ 最初のサッカークラブ 鶴が台スパイダース SC(神奈川)



サッカーは小学4年生のときに友達に誘われて始めました。もともとバスケットボールをしようと友達と話していたのですが、その子が「お兄ちゃんがサッカーをしているからサッカーをやる」と急に言い出して、それで一緒に始めることになりました。大学時代にサッカーを再開し、そこで新たな目標と出会えたことで今の私があります。

池野 伶奈 IKENO Rena

- ・サッカー指導者
- ・高校教員
- ・船橋法典高校女子サッカー部監督

- ▶ ホームタウン 千葉県千葉市
- ▶ 最初のサッカークラブ 村上サッカークラブ(千葉)



幼稚園のときに姉の影響でサッカーを始め、当時は少年サッカーチームに女子が数人混じってプレーしていました。中学に入ってやめてしまったのですが、引っ越しを機にクラブチームに加入し、高校は女子サッカー部のある幕張総合高校に進学しました。高校で選手はやめてしまったのですが、現在は夢だった高校教師になり、生徒にサッカーを教えています。

中学3年生の正月に初めて観戦した全国高校サッカー選手権大会で、高校サッカーの熱量に魅了されたことが私とサッカーの始まりです。自分がプレーするようになったのは大学からでした。大学卒業前に審判資格を取得し、FIFA女子ワールドカップは4大会に参加しました。長く審判員を続けられているのは、サッカーが今も好きだからです。



吉澤 久恵 YOSHIZAWA Hisae

- ・サッカー審判員

- ▶ ホームタウン 東京都大田区
- ▶ 最初のサッカークラブ 実践女子大学女子サッカー部(東京)

大滝 麻未 OTAKI Ami

- ・ジェフユナイテッド市原・千葉レディース 選手
- ・一般社団法人なでしこケア(創設者) ・FIFA マスター

- ▶ ホームタウン
神奈川県平塚市
- ▶ 最初のサッカークラブ
港FC (神奈川)



小学1年生のときに兄の影響でサッカーを始め、中学と高校は、平日は男子サッカー部で、週末は女子チームの横須賀シーガルズで活動していました。海外志向が強かったので、大学卒業後はフランスへ。一度は選手を引退しましたが、今は選手として、現役中にできることをしっかりと積み上げ、次のキャリアにつなげたいと考えています。

鈴木 朱美 SUZUKI Akemi

- ・FC べにばな 選手
- ・日本女子代表チームドクター
- ・山形大学医学部附属病院 整形外科医

- ▶ ホームタウン
山形県村山市
- ▶ 最初のサッカークラブ
山形大学女子サッカー部(山形)



中学と高校はソフトボールをやっていて、サッカーにはそれほど興味がありませんでした。ですが、友人の影響で「ドーハの悲劇」を見てサッカーに関心を持ち、大学から本格的にサッカーをプレーするようになりました。今も選手としてプレーしており、その経験はサッカー選手をサポートするチームドクターの仕事にも生きています。

山本 りさ YAMAMOTO Risa

- ・日本サッカー協会 職員
(日本女子代表 総務)

- ▶ ホームタウン
東京都武蔵野市
- ▶ 最初のサッカークラブ
小金井サッカークラブ(東京)



私は父の仕事の関係でカナダで生まれ、日本に帰国して4歳のときに兄の影響でボールを蹴り始めました。大学卒業後は就職してサッカーから離れたのですが、国体参加を機に、サッカーの楽しさを再確認して選手に復帰。現役引退後、JFAに勤め、日本女子サッカーの代表選手をサポートできる仕事に就かせていただき、やりがいを感じています。

江川 純子 EGAWA Junko

- ・日本サッカー協会 職員
(FIFA 女子ワールドカップ 2023 日本招致事務局本部ダイレクター)

- ▶ ホームタウン
東京都世田谷区
- ▶ 最初のサッカークラブ
FC PAF (東京)



高校の同級生が男子サッカー部のマネジャーをしていて、いつの間にか手伝うようになったことがサッカーとの出会いでした。社会人になってから、男子用更衣室を拝借するような環境で、サッカーに一生懸命な女子選手たちの姿に惹かれてプレーするようになりました。日本サッカーに関わる仕事に就き、サッカーに求められる社会的役割を意識しながら目の前の仕事にまい進する日々です。



風間 理佐 KAZAMA Risa

・日本女子サッカーリーグ 事務局員

- ▶ ホームタウン
山梨県甲府市
- ▶ 最初のサッカークラブ
朝日サッカースポーツ少年団(山梨)

小学1年生のとき、兄に勧められて読んだ『キャプテン翼』が最初のきっかけでした。プレーを始めたのは小学4年生のとき、サッカー少年団の練習に行く兄について行ったら、チームの監督やコーチから誘っていただきました。小学校卒業後は続ける場所がなく、サッカーから離れたのですが、日テレ・ベレーザのセレクションを受けたことを機に、サッカーとの関わりができるようになりました。

北本 綾子 KITAMOTO Ayako

・オルカ鴨川FCゼネラルマネージャー
・JFA女子委員会委員

- ▶ ホームタウン
北海道札幌市
- ▶ 最初のサッカークラブ
札幌アグレ厚別信濃FC(北海道)



サッカーをしていた兄にくっついて行くうちに私も自然とボールを蹴るようになりました。活発だったのでサッカーをしていなければ他のスポーツをしていたかもしれません。27歳で一度引退しましたが、ユース年代から代表選手として活動させてもらいながら、私はその環境のありがたさをちゃんと理解できていませんでした。後悔と反省を経て、今はクラブを通してサッカーというスポーツの価値を多くの人に伝えたいと思っています。

竹村 美咲 TAKEMURA Misaki

・INAC神戸レオネッサ事業部 庶務担当



- ▶ ホームタウン
京都府京都市
- ▶ 最初のサッカークラブ
京都西山フットボールクラブ(京都)

6歳のときに少年団のチームに入ると同時に本格的にサッカーを始めました。私は現役生活で前十字靭帯を5度断裂し、引退しました。辛くて苦しくてサッカーをやめて生きる道も考えましたが、後悔をしたまま生きたくはないと思い、今の裏方の仕事を選びました。

中山 千恵美 NAKAYAMA Chiemi

・東京都サッカー協会 普及担当係長
・SOCIOS.FC代表

- ▶ ホームタウン
東京都大田区
- ▶ 最初のサッカークラブ
SOCIOS.FC(東京)



小学校の体育の授業で初めてサッカーを経験しました。サッカーをしたくても、当時は女子がサッカーをする環境がまだなく、高校に進学するときにサッカー雑誌で見つけた「選手募集」を頼りにSOCIOS.FCに入りました。チームで活動する中で指導者、審判員と自分の役割が増え、国体や東京都女子トレセンに関わるようになり、東京都サッカー協会との縁ができました。

1989年の北海道国体のとき、私が体育教員として勤めていた北海道高等盲学校でも国体に向けて選手を集めて練習をしていました。私はそのお手伝いをしていて、そこで一緒にトレーニングしていた「モルテンはばたけ」という女子チームに誘っていただいたことが、サッカーを始めるきっかけでした。北海道サッカー協会が女性役員を登用するときに私の名前を挙げていただき、社会貢献や女子サッカーの普及などに携わるようになりました。

鷺津 裕美 WASHIZU Hiromi

- ・北海道サッカー協会 役員
- ・特別支援学校教員

- ▶ ホームタウン
北海道札幌市
- ▶ 最初のサッカークラブ
モルテンはばたけサッカークラブ(北海道)



八鍬 美由紀 YAKUWA Miyuki

- ・カヌーポロ指導者
- ・筑波大学女子サッカー部創設者

- ▶ ホームタウン
埼玉県さいたま市
- ▶ 最初のサッカークラブ
筑波大学女子サッカークラブ(茨城)

高校時代はサッカー好きの同級生に「ボールを蹴って遊ぼう」と誘われ、仲間うちで蹴って楽しんでいました。同級生に誘われて、当時、地元で唯一あった女子サッカーチームの練習に参加したこともあります。大学では「女がサッカーをやるの?」という声に反発するように女子チームを創設しました。社会人になってからもサッカーを続けましたが、ひょんなことからカヌーの世界に飛び込み、今はサッカーから戦術を学んでいます。

野口 亜弥 NOGUCHI Aya

- ・順天堂大学スポーツ健康科学部 助教
(女性スポーツ研究センター研究員)

- ▶ ホームタウン
千葉県野田市
- ▶ 最初のサッカークラブ
ウイングス北関東(茨城)



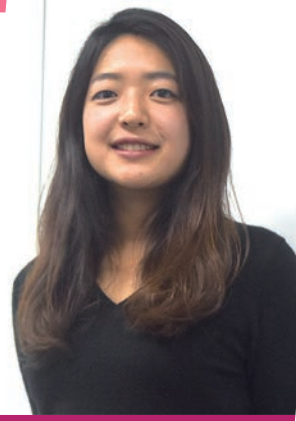
3歳の頃、兄が通っていた幼稚園にサッカークラブがあり、私もやりたいと両親に頼んでサッカーを始めました。自分で選択した道なのに思い通りにならないことを環境のせいにしていた時期もありましたが、最後まで代表入りを目指すことができた現役生活でした。サッカーを通して新しくやりたいことを見つけ、今はスポーツを通じた国際協力や国際開発に自分の経験を生かしたいと考えています。

サッカーと出会ったのは小学3年生でした。母親が当時J2だった大宮アルディージャの試合のチケットをもらったので、3歳年下の弟と3人で観戦に行きました。今でも大宮サポーターとしてホームゲームには通っています。高校までサッカーを続け、大学でドイツ留学したときに広告関連の仕事に興味を持ちました。現在、女子サッカーに関わる仕事も担当させていただいていることはとても幸運なことです。

中倉 あかね NAKAKURA Akane

- ・株式会社電通(国際サッカー部) 社員

- ▶ ホームタウン
埼玉県さいたま市
- ▶ 最初のサッカークラブ
さいたま市立浦和中学校サッカー部(埼玉)



・サッカー指導者
・JFA ナショナルコーチングスタッフ

選手として、指導者として“最初の一歩”を歩んできた

常に自分で決めて行動する

1989年に創設された日本女子サッカーリーグで第1号ゴールを決め、日本女子代表として第1回FIFA女子世界選手権(現FIFA女子ワールドカップ)に出場、日本サッカー界で初の女性代表監督に就任するなど、常に日本女子サッカーの最初の一歩を踏み出してきた高倉麻子さん。そのキャリアの原点には、福島県の材木商だった父との思い出がある。

「小さい頃は父の運転で出かけ、犬と一緒に野山を駆け回っていました。器用な父を見ていたので(自分も)何でもできると考えるようになりました」

福島市内のサッカー少年団に入団し、家では父が庭に作ったゴールで遅くまで練習した。中学に上がると東京都のFCジナンンに加入。高校には女子サッカー部がなかったため、平日は近くの高校の男子サッカー部の練習に参加し、週末は上京して三菱養和クラブに通った。

「まだ新幹線がない時代。東京まで電車で片道3時間半かかりましたが、やりたいことだから苦ではなかったです。両親もつかず離れずの距離感で私を見守ってくれていて、何をするかはいつも自分で決めていました。時には失敗することもありましたが、その姿勢は選手時代も変わらず、選手たちに考えさせる今の指導方針にもつながっています」

1983年、15歳で代表に初選出。1985年に読売日本サッカー・ベレーザ(現、日テレ・東京ヴェルディベレーザ)に入団し、2度のリーグMVPと7度のベストイレブンを受賞。代表では国際Aマッチ79試合出場・30得点を記録した。2004年に現役引退

を決めたが、指導者になるつもりは全くなかったという。

「最後に代表に選ばれたのは30歳のとき。サッカーへの理解や考え方は深くなってはいたけれど、その感覚は人に伝えることはできないと思っていました。私自身、監督に言われることすべてに納得していたわけじゃないですから、指導者も大変そうだなと(笑)」

本格的に指導者の道を歩み始めたのは、それから2年後だった。



模索しながら自分にできることを

ものを書いたり、作ることが好きだった高倉さんは漠然とその道を模索する。一方、C級コーチライセンスを取得し、スクールで週1、2回サッカーを教えたり、試合の解説もしていた。そんな高倉さんに「手伝ってくれないか?」と声をかけたのが当時の上田栄治JFA女子委員長。これを機にJFAトレセンコーチとして選手育成に携わるようになる。

「ユース年代の試合を視察したとき、土砂降りの雨の中でボランティアの男性レフェリーが一生懸命に笛を吹かれていたり、他にもたくさんのボランティアの方に活動を支えられていることを知って、こういう方たちのサポートの上に代表があるのだと。自分は何も知らなかったのだと思いました」

戦術や選手の起用法、サッカー観はいろいろな監督の下で学んできた。それを礎に指導について学びながら、国際サッカー連盟(FIFA)の技術委員として世界の女子サッカーを見て回り、世界の潮流を把握しながら海外での人脈を培った。2011年にS級コーチライセンスを取得してからは「選手たちに良い指導をしてあげたい。責任をもってやらなければいけない」と思うようになった。2013年にU-16日本女子代表監督に就任すると、

翌年のFIFA U-17女子ワールドカップで初優勝、2016年にはU-20日本女子代表となでしこジャパンの監督を兼任。日本女子サッカー全体のレベルアップを視野に選手を幅広く招集して強化を図り、ピッチ上では選手に指示を待つのではなく、「自分で考え、正しく判断する」ことを求めてきた。

「完成形の理想は高く持っていますが、決まり事を多く作ったり、『これをしなさい』とは言わないです。人から与えられたものは重みがないのですぐ忘れてしまいますから。ただ、指導については私自身もずっと勉強中です。S級を取って指導の知識は学びましたが、結局、一番大事な現場のコントロールは自分自身でつかなければなりません。そこに正解はなくて、いつも自問自答しています」

どんな試合にも必ず“勝ちイメージ”を持って臨む高倉さん。

「サッカーが好きなのはずっと変わらないですし、いろいろな分野の人と会うのも好き。そういう人たちと何かをやり遂げることは喜びであり、私の幸せです」

常に自分の道は自分で選んできた。そのスタンスを今も貫いている。

・サッカー指導者(GK)
・JFA ナショナルトレセンコーチ

世界で活躍できるGKを育てたい

GKと運命の出合い

ゴールキーパー(GK)をすることになった最初のきっかけは小学生のとき。友だちに誘われて当時は珍しかった女子サッカー部に入部した。入部して最初の試合でGKの選手が体調不良で来られず、轟さんが代わりに出るようになった。

「『初めてにしては意外とできるやん』とコーチやチームメートから言われたんです。でも失敗もたくさんして

しまっ、その悔しさからGKの練習を重ねました」

中学校には女子サッカー部がなかったため卓球部に所属し、高校進学とともに地元・大阪のクラブチーム、交野FCでサッカーを再開した。数日間はフィールドプレイヤーとして練習していたが、またもGKのチャンスが巡ってくる。

「最初の公式戦にGKの選手が来られなくなったんです。それで経験者の私が出るようになって、試合前日の夜は家の外で暗い中で練習していました」

ポジションをGKに定めた轟さんは、1996年、高校卒業と同時に松下電器パナソニックバンピーナ(現、スベランツァ大阪高槻)に加入し、Lリーグ(日本女子サッカーリーグ)デビューを果たした。

「その頃のリーグは、自分のチームも対戦チームにも世界でトップクラスの外国人選手がいて、GKの中国人選手もいる環境でした。そういう意味では恵まれていた時代。良い経験をさせてもらいました」

2004年からアルビレックス新潟レディースでプレーし、2006年になでしこリーグ2部優勝に貢献すると、翌シーズンの終わり、リーグ通算155試合出場の記録とともに30歳で現役を退いた。



GKの経験を指導に生かす

「振り返ると、不思議に思うほど当時は自分を追い込んでプレーしていました。次の1年も追い込んでできるか考えたときに難しいと思い、引退を決意しました。やり切った感じでしたね」

ただ、引退後のセカンドキャリアを考えていたわけではなかった。「実家に帰って、その後のことは少し休んでから考えよう。いずれは指導者もできたらと思っていましたが、具体的には考えていなかった」と轟さん。間もなくして新潟からGKコーチのオファーが届き、やろうと決断した。指導は毎日手探りだったが、選手一人一人と向き合いながら、教える楽しさを感じるようになっていった。

「選手が今までできなかったことをできるようになって、それを本人が実感して充実した表情をしていたり、喜んでいる姿を見るとうれしい。GKのメンタルは、

GKをしていた人にしか理解できない部分もあるので、私の経験は強みになります。選手それぞれに合った働きかけを心掛けています」

その後、セレッソ大阪のスクールコーチなどで指導実績を重ね、2012年度からはJFAナショナルトレセンコーチに就任し、選手育成や指導者の養成に携わってきた。また、JFAの女子のTSG(Technical Study Group)の一員として世界の各種大会を視察・分析することもあり、世界のGKのトレンドを把握しながら見識を深めている。

「世界には、育成年代でも、決断力や自信に満ち溢れた存在感を備えた選手が多くいます。日本でもそうした資質を備えた選手はいますが、こちらが働きかけないといけない部分もあるので指導者の皆さんには『選手が自分で決断してトライしたことを、まずは認めて褒めてあげてください』と伝えています。失敗は修正すればいいですから」

GKの価値をもっと上げたい

轟さんは現役引退後に指導者ライセンスを取得し、現在はA級コーチとGKレベル3(旧GK-A級)コーチライセンスを保有する。海外では現役時代に指導者ライセンスを取る選手が多くいるが、日本ではまだ浸透していない。「現役時代に資格を取っていたら、もっとサッカーの理解が深まってプレーに生かせたと思う」と轟さんは言う。GK育成への思いは強い。

「GKコーチとしてもっと成長して、選手たちの成長をサポートしたい。日本でもっとサッカーが文化になっていけばいいなと思っています。その中でGKの楽しさを多くの人に伝えて、GKの価値をもっと上げて、人気のあるポジションにしていきたいですね。世界で活躍できる選手を育てて、その選手に憧れる子どもたちが増えていってくれたらと思っています」



母として、指導者として広げたセカンドキャリアの可能性



理想と現実のギャップを越えて

U-20日本女子代表のコーチを務める宮本ともみさんは、現役時代、3度のFIFA女子ワールドカップと2004年アテネオリンピックに出場した。23歳で結婚し、出産を経て、27歳の時に日本女子代表に復帰。日本で初めてママさんの代表選手が誕生した。復帰後は育児とサッカーを両立させる中で女子ワールドカップにも出場し、JFAが女子代表選手のサポート体制を整えるきっかけをつくった。

「1999年に参加した女子ワールドカップ（アメリカ大会）で、同じホテルだったアメリカ女子代表の選手が子どもを連れてくる姿を見て、すごくカッコいいなと思ったんです。代表の活動に家族も同行していて、食事会場での雰囲気もうすごく自由。私は、目標にしていたアテネオリンピックにも出場して一区切りついて、子どもを授かったのはその頃でした。妊娠が分かったときはうれしさがありつつ、もうサッカーができないのかという残念さもありました。でも、母になっても代表として活躍しているアメリカの選手を見ていましたし、チームメートも『帰ってきてね』と言ってくれたので絶対に復帰するつもりでした」

出産後、周囲の支えもあり、現役復帰を果たした。「妊娠中はトレーニング方法が分からず、特に何もし



ていませんでした。出産して2カ月ほどは育児が大変すぎて復帰どころじゃなかった。でも半年くらいして育児が落ち着いてきたときに、なでしこジャパンが伊賀（三重）で合宿をしていたので子どもと一緒に遊びに行っただす。みんなが頑張っている姿を見て、あらためて復帰したいと思いました」

復帰から半年後、2007年の女子ワールドカップに出場する。JFAは宮本さんをサポートすべく、代表の活動期間はベビーシッターを帯同させた。

「復帰後、代表キャンプに招集されたことはとてもうれしかったのですが、子どもを置いてはいけなかったので参加を諦めかけました。私のようなケースは前例がなかったのでJFA内で多くの議論があり、子どもを帯同できる環境を整えてくださいました。当時の女子委員長だった上田栄治さん、大橋浩司監督も掛け合ってくれました」

指導者として目指す世界

34歳、現役引退を発表した。サッカーに関わる仕事がしたいと考えていたが、指導者になりたいとは思っていなかった。その考えに変化が生まれたのは、試合の解説をしていたとき。

「攻撃と守備の良い点、悪い点を瞬時に分析して伝える難しさを感じました。解説の仕事を突き詰めるためにサッカーをもう一度勉強しようと思い、C級コーチ養成講習会を受講しました。それが面白かったんです。サッカーの仕組みや理論を学ぶ中で、現役時代に感覚的にプレーしていたパスやシュートの理論も理解できましたし、指導実践をしているうちに指導も楽しいと思うようになりました」

引退から2年後にB級コーチライセンスを取得。高田短期大学女子サッカー部の監督に就任し、本格的に指導者の道に進んだ。その後はJFAナショナルトレセ



ンコーチとして選手育成にも関わり、A級コーチライセンスも取得した。2016年にはU-16日本女子代表のコーチとなり、2019年には、AFC U-19女子選手権の優勝に貢献。宮本さんは指導の楽しさと今後の目標についてこう話す。

「選手時代は感覚でプレーしている部分が多かったので、それを短い言葉で選手に分かりやすく伝えることは難しいですし、伝えるタイミングもとても大切。だからこそ、自分の言葉をきっかけに選手が成長したことを実感できたときは、うれしいですね。それは自分が選手のときに感じた喜び以上のものです。人を上達させることの方が難しいですから。指導者としてはまだまだなので勉強を続けて、いつかは男子チームの指導もしてみたいですね。指導者は男女関係なく戦える場だと思っているので、しっかりと（指導者として）評価され、信頼を得て、より高いレベルで指導ができればいいなと思っています」

サッカー選手として実績を残した宮本さんは、今も、指導者として自身を磨きながらキャリアを積み上げている。

・サッカー指導者(海外)
・ROKUA CLUB (ロクアイクラブ) コーチ

アジアの女子サッカー発展に貢献する



高校から本格的にプレー

JFA公認の海外派遣指導者として、モンゴルでU-15とU-18の女子代表監督を務める河本菜穂子さん。8歳のとき、地元のスポーツ少年団でサッカーを始めた。中学生になると、サッカーを続ける環境がなかったためバスケットボール部に所属し、高校入学時に大阪FCレディース(パニーズ京都SCの前身)で本格的に選手としてのキャリアをスタートさせた。

「漫画家の女性が集まったチームで、サッカー経験者は私ともう一人くらいでした。1年目は関西女子リーグ2部でほぼ全敗だったのですが、翌年に優勝して1部に上がり、関西で4強と言われるまでになって、私が大学3年生のときに旭国際パニーズとしてリーグ(日本女子サッカーリーグ)に参加しました。弱いチームが勝ち上がっていくサクセスストーリーのようでした。(当時の)パニーズは企業チームだったので寮生活をし、サッカーだけをして給料をいただくという恵まれた環境でサッカーに集中することができました」

リーグで6シーズンにわたってプレー。けがの影響もあり、26歳で現役引退を決めた。その後は1年間アメリカに語学留学し、帰国後は指導者の道へ進んだ。きっかけは、大阪FCレディースとパニーズで監督をしていた今のご主人からの誘いだった。

指導者への転身

「私は週に1回、幼稚園でサッカーを教えていました。2001年、ちょうど2002FIFAワールドカップの開催に向けて盛り上がっていたときに主人が兵庫県西宮市の依頼でフットサル場の運営を任せられ、私も開設するスクールを手伝うことになっていました。しかし、フットサル場の開設が直前に中止となり、スクール事業だけ継続することになりました。それがロクアイクラブです」

キッズ年代(10歳以下)を中心に指導を続け、2002年には兵庫県にロクアイクラブを創立し、2005年に京都府で、2008年に滋賀県でスクール事業をスタート。Jリーグのアカデミー(育成組織)やトレセンに多くの選手を輩出してきた。2008年にはAFC A級ライセンスとJFA公認A級U-12コーチを取得。大阪女子トレセンも任されるようになり、多忙な指導者生活を送っていた2014年、転機が訪れた。

「2014年に受講したJFA

女子インターナショナルコーチングコースで仲良くなったモルディブの女性指導者から、『語学も資格も条件を満たしているのにどうして女子を教えていないの? アジアに行けば機会はあるけど、女子をやってみたい?』と誘われたんです。その後、主人に相談し、『海外にチャレンジすることはなかなかないのでチャンスがあるならやってみようほうがいい』と後押しもあり、や

ってみようと思いました」

その後、JFAを介してモルディブに正式に派遣されることになった。

文化の違いを乗り越えて

河本さんは2017年まで約2年間、モルディブ女子代表監督を務め、2019年2月にはU-16/U-19モンゴル女子代表監督に就任した。常夏のモルディブから冬はマイナス30度にもなるモンゴルに移って活動している。2つの国で言葉や文化、宗教などさまざまな壁にぶつかることもあったが、生来の好奇心の強さと「行った国に染まりやすい」という順応性の高さで乗り越えてきた。

「モルディブはイスラム教が国教で『すべて神様が決めている』という教え。『頑張る』という言葉あまり使わないし、負けても『神様が決めたこと』と受け止めるので日本とは感じ方が違います。文化や宗教の違いはもちろんあるので、私は選手たち自身がどうしたいのかを問いかけるようにしました。『目標を持って自分が変わらなくて何も変わらないよ』と伝えたんですね。そうするうちに選手たちも少しずつ変わって、サッカーで自分の人生を切り開けると感じてくれるようになりました。選手たちが上達したり、大会で勝ったときは本当にうれしくて、やりがいを感じています」

アジアでは、JFAから派遣された多くの日本人指導者が代表監督や技術委員長、育成コーチなどを務め、各国のレベルアップに貢献している。自身の今後について、河本さんは目を輝かせながらこう話す。

「今みたいにいろいろな国に指導者として行きたいですね。アジアでは日本のチームワークやスキルが高く評価されています。日本を目標にしている国が多くあるので、今後もそのお手伝いができたらいいなと思っています」



・サッカー指導者（海外） ・ビジャレアルCFフットボール総務部 ・JFA 競技会委員会委員、女子委員会委員、将来構想委員会委員 ・Jリーグ理事

フットボール先進国のスペインで“最先端”に触れ続ける

19歳で指導者ライセンスを取得

佐伯夕利子さんが生まれたのはイランのテヘラン。3歳頃まで過ごした後、日本に帰国した。サッカーと出会ったのは小学1年生のときだった。友だちが持っていた艶やかな革のサッカーボールに魅了された。

「当時は地元で女子チームがほとんどなく、女子は少年団に入ることができなかったのがで独学でサッカーを学びながら毎日暗くなるまで一人でボールを蹴っていました。それを知った方が少年団に話をしてくれて、1年後にチームに入れてもらったんです」

小学6年生のとき、父親の転勤で移り住んだ台湾では学校の先生に誘われてサッカー部に入部。中学1年生まで男子と一緒にボールを蹴っていた。その後、日本に帰国してしばらくはサッカーから離れたが、高校卒業後に転機が訪れる。

「高校を卒業し、大学進学というタイミングで父がスペインに転勤になって、家族でスペインに渡りました。私は家族と住んで会話も日本語だったので、他の留学生よりもスペイン語が上達せず悩んでいたんです。団体スポーツをやるのが語学習得への近道だと聞いた両親の勧めでスペインサッカー協会に問い合わせ、担当者から通える範囲の女子チームを紹介してもらいました。私が選んだチームの監督にその担当者が電話してくれて、その日のうちに練習に参加していました」

サッカーを再開したのは、スペイン語を習得するためだった。そんな佐伯さんがサッカー指導者の道を歩み出したのは19歳のとき。

「ある日、ふと、自分の人生で鳥肌が立つほど好きなものはフットボール以外にはない、ということに気づいたんです。それで『サッカーで生計を立てたい』と思うようになりました。選択肢はいくつかありましたが、指導者になればフットボールを科学的に勉強できると



思い、指導者に興味を湧いたんです」

辞書を片手に講習会を受けて指導者ライセンスを取得。地元のサッカーチームで子どもたちを教えるほか、解説や翻訳、コーディネーターなど、指導者以外の仕事も引き受けた。実績を積み、人脈を広げながら、最終的に約10年をかけて最高位の指導者ライセンス（JFAのS級コーチライセンスに相当）を取得した。間もなくして、男子3部リーグに所属するエルタ・ボニータから監督のオファーを受ける。2003年、当時のスペインでは、国内リーグで女性が監督をするのは初めてで、それが日本人だったことも大きな話題になった。

学びながら生計を立てる喜び

翌年にはアトレティコ・マドリードの女子U-23チームの監督になり、その後は女子トップチームのスカウティングや育成・普及などに携わった。その仕事ぶりから当時のスポーツダイレクターの信頼を得て、彼がバレンシアCFに移るタイミングで誘われ、佐伯さんもバレンシアで一緒に仕事をするに。クラブでは強化執行部に所属し、書類管理や選手の移籍管理などに携わった。2008年9月、ビジャレアルCFから声が掛かり、現在に至るまで同クラブに勤めている。

「フットボール総務部に籍を置きながら、仕事が終わ

った後はアカデミーなどで指導を任せてもらっています。というのも、スペインで指導者としてフルタイムでお給料がもらえるのは1部と2部の監督くらい。指導者としてフルタイムで雇うのは難しいと。それでクラブが事務の仕事をつくってくれて、指導もできるようにしてくれました」

仕事の形にとらわれないことで、佐伯さんは「サッカーで生計を立てる」ことを実現し続けている。

「いろいろな方にチャンスをもらう中で、さまざまな角度からフットボールを見て、学べたことは、私にとって一番のご褒美。フットボールの最先端で生まれるものの、現場で見て聞いて体感できる環境が、私を28年間スペインにとどめてきたのだと思います」

2018年からJリーグの仕事にも携わり、2020年からは日本の女子プロリーグ創設に関わるなど、日本で活動する機会も増えている。今後、佐伯さんはどのようなキャリアを築いていくのだろうか。

「自分が必要とされている場所、多くを学べる場所に身を置きたいですね。私は、計画を立てません。オープンな姿勢でいること。それによって『これやってみない?』と声をかけてもらえてチャンスが広がり、そこでトライすることで自分のキャリアがより豊かになっていく気がしています」



フットサルと生きると決め、切り開いてきた道

大学時代の転機

フットサル日本女子代表の初代主将を務め、女性指導者として初めてフットサルA級コーチライセンスを取得するなど、日本女子フットサル界の“初めて”を切り開いてきた藤田安澄さん。現在は地元で創設したスポーツクラブ「Atractivo Activity Club」で選手育成や地域貢献に尽力するほか、ブラインドサッカー日本女子代表のコーチも務める。

小学4年生のとき、友だちに誘われてサッカーを始めた藤田さん。女子サッカー部がなかったため中学から8年間はバスケットボール部に所属し、大学時代にサッカーを再開した。

「筑波大学のバスケットボール部で試合に出られる選手は推薦の選手がほとんど。私はなかなか試合に出られませんでした。半ば諦めて練習をこなすだけの自分に危機感を感じ、新しい目標を探すようになりました。それで大学3年生のとき、女子サッカークラブに入ったんです。当時は部ではなく、同好会みたいな感じでしたが、大学からサッカーを始める人が多く、みんなが同じ目標に向かって努力している環境でした。私も再び目標を持って取り組むことができました」

4年生のとき、目標だった全日本大学女子サッカー選手権大会に出場した。弱いチームでも、全員が一丸となることで目標を成し遂げられる。大きな達成感を得ることができた。

運命的な出会い

大学卒業後は体育の教員として新たなキャリアをスタートしたが、高校時代から抱いていた「スポーツ選手になりたい」という思いと、大学の後輩に誘われて見に行ったフットサルとの出会いが、藤田さんを人生の岐路へ導く。

「就職後はスポーツをする時間がほとんどなく、単調な日々で寂しさも感じていました。フットサルはサッカーとバスケットボールが混ざったような競技で、運命的なものを感じ、これで生きていこうと考えました」

目標のために妥協はしなかった。現役生活を長く続けるために自身のプレーの幅を広げ、練習時間を確保するために高校の非常勤講師に転職した。

「授業のないときは体育館でひたすら練習していました。地元のフットサル場で上手な人のプレーを見て盗んだりもしていました」

2003年から約1年、ブラジルのクラブから誘いを受け、ブラジルでプレーした。ブラジルにはフットサル女子代表があり、「日本にも代表チームができれば、一番に名前を呼ばれたい」と新たな目標が生まれた。帰国後は所属した2チームで全国大会3連覇。さらなる成長を求めて2007年、スペインに渡った。

「(海外では)練習も生活もすべてが刺激的でしたが、特に印象的だったのは遠征です。バスで長時間移動して試合後にそのまま帰ってくる。移動距離が長く、気

温差も激しくて。ブラジルでは60時間移動なんてこともありました(笑)。大抵の状況は大したことないと思えるようになりました」

2007年、フットサル日本女子代表が結成され、代表に選出された。「本当にうれしかった。最初の試合でアンセムを聞いたときは涙が出た」と藤田さん。主将としてチームを率い、2007年と2009年のアジアインドアゲームズで金メダルを獲得した。

新たな道をつくる

2011年、「日本の環境ではこれ以上突き詰めることは難しい」と感じ、現役を引退。日本のフットサル環境を良くするため、指導者を志し、2015年にAtractivo Activity Clubを立ち上げた。小中学生にフットサルを教えながら、高齢者向けの体操プログラムも展開するなど地域貢献にも力を入れる。

指導で大切にしていることは、「伝えていることが100%伝わっているか」。選手が本当に理解できているか。選手に問いかけ、言葉を尽くして理解を促す。努力するか否か、それによって成長できるか否かは選手次第だ。「自分の成長を実感できると選手は顔つきが変わる。選手の成長がうれしい」と言う。藤田さんはこれからの展望をこう話す。

「“Atractivo”はスペイン語で魅力的という意味。スポーツ選手は愛され、応援される存在でなければ意味がないと思っています。ここで育った選手が全国大会に出たり、フリーグでプレーしてくれることが目標です。例えば私が指導者をできなくなっても、今の選手たちが指導者だったり、違う形で戻ってこられるようにしたい。このクラブは地元で立ち上げた大切な場所。地域の子どもの居場所にしていけることが、今、目指したいことです」



教員として、生徒たちにサッカーの楽しさを伝える



サッカーに夢中だった学生時代

千葉県船橋法典高校で体育教師をしている池野伶奈さんは、女子サッカー部の顧問を務める。5歳のときに3歳上の姉の影響でサッカーを始め、高校卒業までクラブチームや部活などでプレーした。今の指導も自身の経験が土台になっている。

「サッカーがしくて女子サッカー部のある幕張総合高校に進学しました。創部して3年目くらいの頃です。私はボランチでプレーしていました。同校出身の宮間あやさん（元なでしこジャパン）は、女子サッカー部がなかった時代に男子サッカー部で活動されていて、技術は飛び抜けて上手だったと聞いています。菅澤優衣

香さんも千葉県出身で男子と比べても目立っていてかっこ良かったですね」

高校生ですでに教員を目指していた池野さん。影響を受けたのはサッカー部顧問の先生だった。

「すごく熱心な先生で、部活でもすごく面倒を見ていただき、進路相談にも乗ってもらっていました。私にとって大切な時期を支えてくれた方で、自分もそういう人になりたいと思いました」

高校卒業後は、教育学部のある文教大学へ進学。女子サッカーは同好会しかなかったこともあり、選手は続けなかった。大学では小中高の教員免許を取得。高校の体育教師を目指した。

サッカーを教える喜び

「高校の教員採用試験は受けていたのですが、希望の体育教師は枠が少なくかなり厳しく、卒業後の3年間は小学校でクラスの担任をしながら保健体育教師をしていました。5年目でだめだったら小学校で教えると思っていたのですが、ついに受かり、現在の船橋法典高校への配属が決まったんです。女子サッカー部のある高校でうれしかったです」

同校に配属されて3年目。昨年からクラスを担当し、授業では体育と保健を教える。1年目は陸上部の顧問を任されたが、2年目から希望していた女子サッカー部の顧問になることができた。

「公立高校の部活動は専門のコーチがつくことが少なく、顧問が教えることがほとんどです。サッカー部で長く指導されている先生と一緒に担当させてもらっているのですが、私も初めて体験する練習がたくさんあって新鮮です。私よりも生徒たちの方が上手ですからね（笑）。サッカーを教えるのは難しいです」

女子サッカー部の活動は放課後と休日にあるため、多忙な毎日を送っているが、教員をしながら生徒にサッカーを教える日々は充実している。

「生徒はかわいいです。楽しそうにサッカーをしていたり、試合に勝って喜んでいるのを見ると私もうれしくて、負けるととても悔しいですけどね。サッカーを上達させてあげたい気持ちはあるのですが、高校生ですから、サッカー以外のこともちゃんとやらなければいけないよと伝えていきます。自分の経験から『勉強を今しっかりしておかないと後で辛くなるよ』と。少しうまくいかないとサッカーをやめたいと言う生徒もいて、『高校の3年間は一瞬だし、サッカーだけをさせてもらえる環境はないから大事にした方がいいと思うな』と伝えていきます」

女子サッカーを草の根から支える

高校時代に志した夢を実現させ、高校教師、女子サッカー部の顧問として、生徒と、そしてサッカーと向き合っている池野さん。日本の女子サッカーを草の根から支えている。

昨年9月に結婚し、新しい命も授かった。出産を控えた池野さんを生徒たちは気遣ってくれる。その生徒の思いやりがうれしい。これから先、子育てと仕事の両立に不安もあるが、仕事とサッカーへの思いは失うことなく、人生を長い目で見て柔軟に考えている。

「仕事との両立は家族の協力がなければ難しいので、相談しながら子育てとのバランスを考えていきたいと思っています。今までと同じように仕事をしたいですね。教員は定年が60歳ですが再任用の形もあるので、チャンスがある限り、自分にできることをしていきたいと思います」



好きなサッカーに審判員として関わり続ける

年間100試合以上を観戦

国際審判員として、FIFA女子ワールドカップには1995年大会から4大会連続で参加し、2000年シドニーオリンピックでは日本人女性で初めてFIFA主催大会の決勝を担当し、副審を務めた。国内外で主審、副審として活躍し、現在もお審判活動続ける吉澤久恵さんの原点は、年間100試合以上を見ていた高校・大学時代にさかのぼる。

「高校サッカーから応援している選手をその後も追いかけているうちに、高校サッカー、日本サッカーリーグ、日本代表戦など、ジャンルを問わず毎週末、試合を見に行くようになりました」

進学した実践女子大学では、女子サッカー同好会（後にサッカー部）に入部した。女性が脚を出してプレーするサッカーに両親は反対していたが、吉澤さんは大学卒業後もサッカーに関われたらと思い、卒業前にサッカー審判資格を取得した。

「高校では吹奏楽や華道をしていました。でも、運動は得意だったんです。大学で初めてボールを蹴って、それはもうサッカーというより球蹴りでしたね（笑）。両親は否定的でした。練習は週3回ありましたが、ほぼ参加せずに試合に行っていました。4級の審判資格を取ったのは、笛を吹きたいというよりも自分のステータスになったからです」

審判資格を持ち、サッカーへの情熱を持って試合会場に足を運び続ける吉澤さんを、周囲は放っておかなかった。

国際舞台への道を開く

当時はプロリーグがなく、サッカー人気も今ほどではなかったため、試合を見に行っても観客はまばらだった。その中で頻繁に会場を訪れていた吉澤さんは、関係者に顔を覚えられられるほどになっていた。

「あるとき、トヨタカップ（現、FIFAクラブワールドカップ）を見に行ったら、東京で審判をされている方が日本サッカー審判協会の会合に呼んでくれたんです。当時の東京都サッカー協会の審判委員長に『この子、審判やるから』と紹介されて、促されるままに3級の資格を取りました」

ほとんど“観る”専門だった吉澤さんは、本格的にサッカーの競技規則を勉強し、審判の経験を積んだ。1989年に開幕した日本女子サッカーリーグで、初めて公式戦が割り当てられた。以降、ずっと女子リーグのピッチに立ち続けている。

1996年のアトランタオリンピックから女子サッカーが正式種目になることを受け、JFAは女性審判員の強化に着手する。吉澤さんは先陣を切って1995年FIFA女子ワールドカップに副審（当時は線審）として参加。アトランタオリンピックではリザーブ審判に登録されたが参加はかなわず「すごく悔しくて、それでオリンピックに対する思いは強くなった」という吉澤さん。2000年シドニーオリンピックには副審として派遣された。国際舞台の経験は、審判員として視野を広げるきっかけとなる。

「世界大会とはいえ、日本でしているレフェリングを同じようにするだけです。それがちゃんと評価されることが楽しかったですね。2002年のFIFAワールドカップまでは試合ごとに審判員の組み合わせが変わっていたので、初めて同じチームになった他国の主審の癖を見たり、どうやってサポートしたらいいかを考えながらやっていました。国際大会は世界トップレベルの国や選手が集まる場です。国内で担当する試合よりレベルが高いので、その変化に対応できる技量も求められました」

長く続けられる審判員の魅力

「レールが敷かれていたわけではなく、やっているうちに自分の後ろにレールができていった」と話す吉澤さん。もっとレベルの高いところでやってみたい、という気持ちで審判を続けてきた。

「審判員の役割はファウルを取るのではなく、選手がゲームに集中できる試合環境をつくり、ファウルをさせないようにすることです。私自身はサッカーが好きだから審判も続けてきました。同じ試合は2つとないわけで、正解がなく、奥が深いサッカーだからこそ続けられているのだと思います。何より、審判員は誰よりも間近で選手のプレーを見られる特等席にいるわけですからね」

海外では選手を引退後に審判員になるケースは多い。日本でも審判員をやる選手が増えてくれたらと、吉澤さんは願っている。



自分だけの道を行動力で切り開く

海外での学びを生かす

大滝麻未さんは、フランスのオリンピック・リヨン、浦和レッズレディースなどでプレーした後、25歳で現役を引退し、国際サッカー連盟(FIFA)が運営する大学院「FIFAマスター」(*)を修了した。修了した翌年、2020年東京オリンピックを目指して現役復帰。ジェフユナイテッド市原・千葉レディースでプレーを続けている。2019年7月には、一般社団法人「なでしこケア(通称:なでケア)」を立ち上げた。

早稲田大学に在籍中の2011年、第26回ユニバーシアード競技大会に出場した。その大会で得点王に輝く活躍が欧州屈指の強豪リヨンの関係者の目に留まり、大学卒業後はプレーの場をリヨンに移した。海外への憧れは中学生のときからあったという。「中学生の頃、サッカーでアメリカに遠征したことがあって海外志向が強くなりました。海外でプロとしてプレーしたいと考えていたら、まさかのリヨンから話をいただいたんです」

2012-13シーズンにUEFA女子チャンピオンズリーグと国際女子クラブ選手権を含む4冠に貢献し、2012年にはなでしこジャパンに初招集された。しかし、リヨンの日々は試練の連続だった。

「大学では試合に出られることが当たり前環境にいたのですが、リヨンでは試合に出られなかったり、ベ

ンチにも入れなかったり、海外でプレーするとはこういうことかと思い知らされました。でも、大きな挫折を経験して視野は広がったと思います」

その後、浦和レッズレディース、フランス1部のEAギャンガンでプレーし、2015シーズン終了後に引退を決意。そして、FIFAマスターを受講した。

「選手としては、『自分のもっとできる』と思いながらも、結果がついてこない期間が長く、プレーを続けることに苦しさを感じていました。早いうちにセカンドキャリアを考えておくことで自分の可能性が広がると思いましたし、引退後は女子サッカーのために何かしたいと考えていたんです。FIFAマスターは、スポーツ界で活躍するリーダーに必要な分野を幅広く学べるプログラムだったので、私にぴったりでした。代理人や放映権、クラブライセンスなど、スポーツマネジメントの背景についていると学べて面白かったですね」

受講前は、その後の道を明確にイメージしていたわけではなかった。しかし、FIFAマスターで学んだ経験が、その後の「なでケア」の構想に生かされることになる。

引退後はなでケアの活動を中心に

FIFAマスターを通じて海外のネットワークを作り、キャリアの可能性を広げた大滝さん。スポーツマネジメントの世界に進むかと思いきや、現役生活を再開させた。



「サッカー選手でFIFAマスターを受講している人は少ないのですが、みんな良い意味で“サッカー馬鹿”でした(笑)。朝から晩まで勉強した後も、時間があればサッカーをして、サッカーを見て、サッカーの話を生活。その仲間が『(東京で)オリンピックがあるのだから、もう少しプレーをしたら? 麻未ならできるよ』と言ってきて、復帰を決めました」

パリFCで半年間プレーした後、中高生時に在籍していた地元のニッパツ横浜FCシーガルズ(前・横須賀シーガルズ)に復帰。この年、なでしこリーグ2部で得点王に輝き、翌シーズンからジェフに加入した。

「25歳で引退したときは、“リヨンの大滝”という見られ方をして、代表にも選ばれ、自分の中で勝手にプレッシャーを感じていました。でも今は、サッカーを楽しみながら『成長していく過程で代表に選ばれるように頑張ろう』と考えられるようになりました。海外も含め、これまでの経験がプレーにも生きていて感じています」

「なでケア」では、女子サッカーの普及、選手のキャリア構築、社会課題の解決などに取り組む。選手の立場にいる今だからこそ、発信できる価値があると感じている。

「日本の女子サッカーの競技力は高いので、なでしこリーグに所属する選手たちが、トップリーグでプレーしている自覚をもっと持てると思います。選手のうちにできることを能動的に実践したり、社会貢献を通して自らの意識を変えることで、その後のキャリアも広がっていくはず。なでケアの活動を通して、サッカー選手の価値を高められたらと思っています。私自身、可能性がある限りプレーして、引退後は現役選手と協力しながら活動したいと思っています。将来的には、世界と日本の女子サッカーの懸け橋になれたらいいですね」

・FC べにばな 選手 ・日本女子代表チームドクター
・山形大学医学部附属病院 整形外科医

ドクターとして代表選手をサポートする

サッカーをしながら医師を目指す

なでしこジャパンのドクターとして国内外の活動に帯同する鈴木朱美さんは、自身もサッカー選手としてプレーしている。中学、高校はソフトボールをしていたが、高校時代に「ドーハの悲劇」を見たことがきっかけでサッカーに興味を持ち、進学した山形大学で本格的にプレーを始めた。

「姉が看護師をしており、私も医療系の仕事に興味があったので医学部を目指しました。整形外科医になったのは、『スポーツに関わりたい』という思いからです。山形大学的女子サッカー部は私も含めて初心者が多く、強くはありませんでしたが、全日本大学女子サッカー選手権大会（インカレ）への出場を目標にしていました。医学部は6年制なので、6年間インカレに出られたんです」

医師免許を取得し、卒業後は同大学の医局に所属。関連病院などでの勤務を経て、現在は医学部附属病院の整形外科医に。医師として21年目を迎える。また、社会人を中心とした女子サッカーチーム「FC べにばな」で現役ディフェンダーとしてもプレー。なでしこジャパンに関わるようになったきっかけも、サッカーをプレーしていた縁からだった。

「1992年バルセロナオリンピックの野球代表チームにも帯同されていた増島篤先生は、私の上司の大学時

代の先輩にあたる方で、スポーツ整形外科に興味を持っていた私に、上司が増島先生のいる東芝病院スポーツ整形外科での研修を勧めてくれました。そのときに病院のスタッフとサッカーをする機会があり、一緒に練習をしていたドクターから『女性で女子の日本代表をみてくれるドクターを探している』と聞いて、『やりたいです』と手を挙げたことが今に至るきっかけでした」

チームドクターの経験がなかった鈴木さんは、最初の数年は育成年代のチームを担当し、2016年からなでしこジャパンに帯同するようになった。

選手と共に世界で戦う

病院勤務と代表の活動を両立させる毎日は多忙だが、代表選手たちをサポートする仕事にはやりがいを感じている。医療現場で培った経験を生かせること、自身も選手だからこそ、選手と同じ立場になって寄り添えることは強みだ。

「試合中に選手がけがをした場合、ドクターとしてプレーを続行させるか否かの判断をするのは難しいです。選手が『プレーしたい』と言っても、ドクターとしてはけがの状態を見て、冷静に判断しなければなりません。それには経験の積み重ねが大切なのだと実感しています」

代表選手は所属チームでの活動に加え、代表チームの国内合宿や海外遠征に参加し、よりレベルの高い環境下でハードワークするため、けがを負うリスクは高い。そうした中で、ドクターとして、けがの治療だけでなく、けがを予防するための確かなサポートを心掛けている。

「サッカーではさまざまな傷害が起こりますし、年代によってその内容も変わってきます。けが予防のため、選手たちはフィジカルコーチのもとでセルフケアに取り組んでおり、私も選手やフィジカルコーチという話をしながら、選手の弱い部分を鍛えるトレーニングメニューを個別に作成することもあります」

医師として代表チームをサポートしながら、自身もプレーを続けている鈴木さんは、同じ道を志す選手が増えていることがうれしいという。

「最近では、トップアスリートの中でも選手生命に区切りをつけた後にドクターを目指す方ができており、心強く思います。サッカーも年別の代表に選ばれた選手で研修医になった方がいると聞きました」

FC べにばなの練習は週2回、夜間に行っている。夏場は高校のグラウンドを借り、冬場は体育館でトレーニングを積み、春に行われるJFA主催の全国大会「JFA 全日本O-30女子サッカー大会」や皇后杯に出場することを目指してプレーを楽しんでいる。鈴木さんは自身の未来図を次のように描く。

「代表チームのサポートは、チームドクターとしてのお仕事をいただける限り、良い結果につながるようしっかりと務めたいと思っています。そして、それ以外にも代表の活動やサッカー活動に何らかの形で関わっていくことができればいいなと思っています」



なでしこジャパンを支える縁の下の力持ち

海外で過ごした幼少期

現役引退後、なでしこジャパンを総務の立場から支えている山本りささん。その仕事内容は多岐にわたる。遠征時の交通手段の決定、各種大会のメンバー登録、対戦相手とのさまざまな調整、時には試合後の会見で通訳をこなす。山本さんはカナダで生まれ、日本に帰国後、4歳のときに兄の影響でボールを蹴り始めた。9歳で再び家族と共にカナダに渡った。

「カナダでもサッカーを続けましたが、カナダの学校のスポーツはシーズン制で、私の場合は、1年間の半分はサッカー、残り半分は野球をしていました。子どもたちの親が当番制でコーチをやるんです。現地の公立学校で日本人もいない環境だったので、自然と英語が身につきました」

カナダで約2年半を過ごした後、日本に再び帰国し、中学、高校ではハンドボールとサッカーを掛け持ちするスポーツマン色の日々を送った。

「中学校にはサッカー部がなかったので、社会人チームの小金井サッカークラブでサッカーを続けました。部活が終わった後に社会人チームでサッカーをしたり、土日は父の車でハンドボールとサッカーの試合をはしごしたりしていました」

高校卒業後は早稲田大学に進学。女子サッカー部に所属し、ディフェンダーとして頭角を現し、3年生のときに大学日本一に輝いた。大学卒業後は食品会社就職し、地元の小平サッカークラブでサッカーを続けた。

「社会人1年目に東京国体の選抜チームに招集され、そこで大学時代の仲間たちと再会しました。みんなレベルが高くて、やっぱりサッカーは楽しいなと。それで東京電力女子サッカー部マリーゼのセレクションを受けました」

巡ってきた転機

マリーゼへの入団が決まり、なでしこリーグでサッカー選手としてのキャリアを再スタートさせた。2011年の東日本大震災の影響でマリーゼの休部が決まり、ASエルフェン狭山(現、ASエルフェン埼玉)に移籍。

翌年、マリーゼの移管先となったベガルタ仙台レディースに復帰し、2015年まで計4シーズンを戦った。

「引退のタイミングについては、正直迷いました。しかし、就職活動中に面接を担当していただいた方に現役続行を後押しいただき、引退を1年見送ったこともあり、悔いなく選手生活を終えることができました」

現役引退後は、一度アディダスジャパンに就職。その後、就職希望先の一つだったJFAへ転職することになった。

「チーム」を支える黒子に

総務として代表チームの国内合宿や海外遠征に帯同し、現場でも活動をサポートする。代表選手の中には現役時代に対戦した選手もいて選手たちとの距離は近い。

「選手とはいいい距離感で仕事ができていると思います。また、選手を近くでサポートできる環境にいさせてもらっていることは

幸せなことだと感じています。私としては、みんながストレスなく、スムーズに試合に入れているかどうかを重視しています。選手やスタッフに『(運営面で)あの場面はスムーズでよかった』と言われるとうれしいですし、今後もそういう黒子でありたいです」

現場で起きていることを広い視野で捉え、柔軟に対応する力は、センターバックとして後方からチームを支えていた現役時代に培われたのかもしれない。今の仕事にやりがいを感じているからこそ、これからも選手たちが安心してサッカーに集中できる環境をつくりたいと思っている。

「今の仕事をまっとうしたい。仕事の積み重ね方や人間性も含めて、周りから信頼される存在になりたいです」



サッカーで広がった視野、培った経験を社会に生かしたい

サッカーとの「2度目の出会い」

江川純子さんは、これまでJFAの代表チーム部や国際部、女子部部長を務め、現在はFIFA女子ワールドカップ2023日本招致の事務局本部を統括する立場にいる。日本女子代表の愛称「なでしこジャパン」の生みの親だ。江川さんがサッカーと初めて接点を持ったのは高校時代にサッカー部のマネジャーになったときだった。

「私が通っていた都立の高校は校庭が小さく、フルピッチで練習できなかった所以他校に電話をして練習試合を申し込んだり、試合時は選手のドリンクを作って用意したり、いろいろとマネジャー業をこなしていました。そこでアスリートをサポートする面白さを知りました」

マネジャーを長く続けるつもりはなく、大学ではサッカーから離れた。大学卒業後は一般企業に就職し、その後、転職した外資系スポーツ用品メーカーでサッカーと2度目の出会いを果たした。

「高校サッカー部の先輩が女子サッカーチームのコーチをしていると聞いて、練習を見に行きました。そのときに、更衣室やシャワーも整っていない環境で一生懸命プレーしている女子選手たちを見て衝撃を受けました。応援したい気持ちが湧くと同時に、自分もサッカーをしてみたいと思い、チームに入れてもらったんです」

そのFC PAFは2020年に40周年を迎える女子チームで、当時ではまだ珍しい女子のタウンクラブだった。人生で初めて蹴ったボールは、イメージしていたものとは違ったという。

「見るのとやるのでは大違い。ボールを相手の足元にパスすることがこんなに難しいのか、と思いましたね(笑)。でも、一生懸命練習をしていたら足元にパスがいくようになって、これは面白いぞと思いました」

日本女子代表の愛称を発案

サッカーをしていたことをきっかけに、2001年、茨城県つくば市で開催されたJFA主催のフットボールカンファレンスで、海外サッカー関係者のアテンド役に誘われる。外資系企業で培った語学力、サッカーの知識、コミュニケーションスキルを買われたのだ。そこで多くのサッカー関係者に会い、サッカー関連の仕事に転職することになった。

「2001年FIFAコンフェデレーションズカップの大会運営本部に就職することになり、続けて2002年FIFAワールドカップ日韓大会の大会運営にも関わらせてもらいました。当時のワールドカップ日本組織委員会は、主にJFAや各省庁などからの出向で構成された組織で、その中に外からぼんと入った感じでした。2001年の年明けから大会に向けて激動の日々でした」

組織委員会からJFAに籍を移し、JFAの業務と並行してFIFAやAFCの主催大会でマッチコミッショナーなどを務めたりと、さまざまな役割をこなしてきた。仕事が忙しくなり、FC PAFの練習にはなかなか行けなくなったが、江川さんの多岐にわたる経験が、日本女子代表の愛称誕生につながる。

「私は当時、技術部でマッチメークなどを担当していたのですが、書類を作成するときに男子は『日本代表』と書くのに、女子は必ず『女子』と書かなければならなかったのだ(笑)。そこで、愛称をつけたらもっと親しみを持ってもらえるのではないかと、そのアイデアを提案しました」

当時、日本女子代表は2004年アテネオリンピックのアジア最終予選を控えており、女子サッカーに国内の注目が集まっている時期だった。江川さんの提案は通り、チームの愛称を公募。そして「なでしこジャパン」が生まれた。その愛称は、今や世界中で認知されている。



サッカーを通して知ったスポーツの社会的役割

江川さんは「物事のきっかけづくりは、内側にいる人間の方がツボを押さえやすい」と言う。これまで積み上げてきた知識や経験を、自身が必要とされる場所で生かしていきたいと考えている。

「世界中でスポーツの社会的責任は大きくなっています。私自身、そうした責任を感じていますし、スポーツやサッカーから学ばせてもらった経験を、サッカーの外にまで視野を広げて社会のために役に立てたらうれしいです」



名門クラブで培った経験を生かしてリーグを支える

飛び入りの練習参加で一員に

日本女子サッカーリーグの事務局で、大会の運営責任者を務める風間理佐さんは、日テレ・東京ヴェルディベレーザ（当時は読売日本サッカークラブ女子ベレーザ）の元選手だった。表舞台に立つ選手から裏方の仕事へと続くキャリアは、どのように築かれてきたのだろうか。ベレーザに入団したのは1993年、風間さんが19歳のときだった。

「小学生のときは地元のサッカーの少年団に入っていました。中学校ではサッカーを続ける場所がなかったのでバレーボール部に所属し、中学3年生から高校まではハンドボールをしていました。しかし、その間もずっとサッカーをやりたいと思っていたんです。そうしたら、高校のサッカー部の先生が当時ベレーザの監督をしていた竹本一彦さんを知っていて、それでベレーザのセレクションがあることを教えてもらいました」

セレクションを受けるためチームを訪れた風間さんだったが、アカデミー（下部組織）の練習に参加することになる。ベレーザと言えば、当時今も代表選手を多く輩出している名門クラブだ。

「当時、地元には女子サッカーの情報がほとんどなく、私はベレーザがどんなチームかも知らない“井の中の蛙”でした。アカデミーの練習には、当時中学1年生だった荒川恵理子選手（後に日本女子代表）たちもいたのですが、実はその練習がセレクションだったんです」

その後、入団を認められ、ベレーザの一員として7シーズンプレーした。高倉麻子さん、野田朱美さん、大竹七未さん、澤穂希さんなど日本女子サッカーをけん引する代表選手たちがしのぎを削る中、試合の出場機会はなかなか得られなかったが1年目にはリーグ優勝を経験した。



©Kyoko MATSUDA

「ポジションはFWからGKまで全てやらせてもらいました。当時のベレーザはうまいばかり。すべてが新鮮で（その中で）ボールを蹴れることが楽しくて仕方なかったです」

表舞台から支える立場に

1990年代に入ってバブル経済が崩壊し、代表チームの成績不振も相まって女子リーグの勢いは衰退。選手をしながらアルバイトでフロント業務をこなしていた風間さんは、厳しい実情を目の当たりにしていた。

「外国籍選手やプロ契約選手がいなくなり、スタッフが減っていく…。ヴェルディも財政的に厳しくなっていて、クラブを維持するためにベレーザを廃止と言われていたんです。だからこそ、ベレーザの選手たちは結果を出し続けることでチームを存続させようと思死でした」

その後、風間さんは27歳で現役を引退し、そのままフロントに入った。

「私はスタメンで出るような選手でもなく、好きという理由だけでサッカーを続けていたので27歳でやめようと思っていました。それと同時に、私の好きなアーティストが自分たちを支えてくれているスタッフたちを

よく紹介していたこともあり、裏方の仕事がしたいと思っていたんです」

現場で築いた信頼と実績

風間さんは男女トップチームからアカデミーまで全カテゴリーのホームゲームで運営責任者を務め、マネジメントディレクターとして海外遠征のアテンドも任された。そして、2013年、転職を決意する。

「選手時代を含めてクラブには20年在籍していたので、違う世界も見てみたいと思うようになりました。日本トップリーグ連携機構からお話をいただき、そこで他競技で活躍されているいろいろな方と仕事をさせてもらったことは貴重な経験でした。その後、またサッカーに関わ

る機会があれば話をしていたときに、日本女子サッカーリーグから機会をいただいたんです」

現場で築いた人間関係を大切に、自らの行動を起こすことでキャリアを切り開いてきた。リーグでの仕事の醍醐味と今後の展望を風間さんはこう語る。

「クラブ時代、他チームも含め共にした選手やスタッフがこの世界の多方面で活躍されているので仕事はやりやすいです。

将来的には選手たちのプレー環境が（今よりも）良くなることを願っています。また、その環境が良くなることでサッカーをやりたいと思ってくれる子どもたちがもっと増えてくれたらと思っています」



サッカーの力で、地域を豊かに

絶頂期に引退

なでしこリーグ2部のオルカ鴨川FCでGM（ゼネラルマネージャー）を務める北本綾子さんは現役時代、浦和レッズレディースのストライカーとして活躍した。2004年6月になでしこジャパンに選出されて以降、約7年間、代表に名を連ねた。当時の代表には澤穂希さん、宮間あやさんをはじめ、2011年のFIFA女子ワールドカップ・ドイツ大会を制するメンバーがそろっていた。「あの頃の代表の雰囲気は強烈でした。疲れた素振りを見せていても、いざピッチに入るとすごい集中力を発揮するんです。そのオンとオフの切り替えが半端ではなく、自分だけ宙に浮いているような感じがしていました。そういう選手たちと一緒にサッカーができた経験は大きな財産です」

浦和でもハイレベルなポジション争いの中、力強いドリブルやゴールへの鋭い嗅覚を生かしてチームをけん引した。だからこそ、2011年、27歳での現役引退は周囲を驚かせた。「私にとってサッカーがより深く理解できるようになり、体も動いていた時期でした。引退は自分のメンタル面の弱さによるものだったと思います。ある嫌なことがあり、それに対して自分の思いだけで決断してしまっただけです。選手として与えてもらっていたことを総合的に考えられず、一つのことしか見えていなかった。やめて1、2年は後悔しました」

新たな立場で得た発見

当時をそう振り返る北本さんは引退後、サッカースクールを主宰して育成に携わり、2014年にはオルカ鴨川FCの立ち上げに関わった。そして同クラブで2015年まで選手を続け、選手をしながら監督とGMも兼任。県リーグ2部からわずか4年でチームをなでしこリーグ2部に導いた。

「引退して選手としての価値がなくなって初めて『守られていたんだ』と気づいたんです。それで『自分でやるしかない』と会社やスクールを立ち上げ、その中でオルカに携わるチャンスももらいました。選手一人にどれほど人手や費用がかかるかを知り、突発的なやめ方をした自分は良くなかったとあらためて反省しました。そして、サッカー界に何かを残さなければいけないと思ったんです」

2018年以降は立場をGMに一歩進め、クラブの強化、育成、普及に努めている。その行動力と人望の厚さで的確な選手補強を行い、2019シーズンは2部で優勝争いを繰り広げ、1部昇格まであと一歩だった。「選手時代は自分のプレーを楽しんでもらえる喜びがありました。今は、クラブや選手が頑張っている姿を見てもうらやましく、地域のイベントで地元の人たちと触れ合う中で、より多くの方に喜んでいただければいいですね。可能性のある仕事にやりがいを感じています。スポーツの価値は、多くの人に見てもらうことで生まれると思うので、選手たちが持っているパワーをうまく伝えられる環境を用意したいですね」

未来へのビジョン

サッカーの内容だけでなく、集客にも力を入れるオルカのホームゲームには毎試合800人近い観客が入る。また、現役を退いた選手をクラブの運営スタッフに起用するなど、セカンドキャリアへの取り組みも行う。引退後、自身のセカンドキャリアと向き合う中でさまざまなことを感じてきた北本さんは、現役時代の日常の過ごし方が大切だと話す。「“デュアルキャリア”という言葉が注目されているように、選手をしながら何かに取り組むことが、その後のチャンスにつながると思います。もし現役時代に戻れるなら、語学は絶対にやりますし、海外に行って苦労

するのでもいいですね。せっかく体育大学に通って学べる環境にあったのに、指導者にはならないと決め付けて勉強も疎かにしていたので、学生時代に戻れるなら授業にも全力を注ぎたいです」

現役時代の自身の経験を糧にしてクラブを発展させてきた。多様な人々と触れ合いながらクラブの新たな価値をつくり出していく喜びも、時には周囲の声に惑わされることなく「突き進む」ことの大切さも、今は知っている。

「次の人生のビジョンがないのが私の特徴です（笑）。目の前のことに全力で取り組むことで、自分が次は何をしたいと思うんだろう？と。それが楽しみです。ただ、ここからステップアップしていくためには、もっと先を見る力が必要だと思っています」



苦しくても自分と一番向き合える道を

けがとの戦い

竹村美咲さんは、高校時代に2度の日本一に輝き、年代別代表に選ばれた経験もあるディフェンダーだった。しかし、度重なるけがにより、22歳で現役を引退。若くして人生の試練に立ち向かい、自分自身と向き合い続けてきた。

サッカー少年団のコーチをしていた父、サッカーをしていた兄の影響で、手で触るより先にボールを蹴っていた。少年団でサッカーを始め、バニース京都SCのアカデミーチームと掛け持ちでプレーした。中学1年生でなでしこリーグ2部デビューを果たし、高校は関西の強豪、日ノ本学園高校に進んだ。しかし、最初の2年はけがとの戦いだった。

「入学して1カ月、練習試合で前十字靭帯を切るけがをしました。8カ月のリハビリを終えて復帰しましたが今度は逆足の前十字靭帯を切ってしまったんです。冬の選手権（全日本高等学校女子サッカー選手権大会）に出たくてリハビリを頑張りましたが、まともにサッカーができたのは高校3年の1年間だけでした」

それでも、高校最後の1年で高校女子サッカーを代表する選手となり、インターハイと高校選手権の二冠を達成し、U-18日本女子代表にも名を連ねた。

「日の丸が付いたユニフォームを着ることは本当に特別だと思いました。何より、父が喜んでいることがすごくうれしかったです」

高校を卒業した2015年、INAC神戸レオネッサに入団。2シーズン目の開幕前、再び悲劇に見舞われた。「検査では問題ないという診断だったので短期間のリハビリで復帰しました。痛みと違和感はありませんでしたが自分は大丈夫だと言い聞かせ、痛みを我慢して自分を追い込み続けました。そうしたら夏に走れなくなり、その後、両膝の前十字靭帯が機能不全と診断されました」

半月板もボロボロの状態だった。その後は長期休養という形でINAC神戸を退団し、1年間は復帰を目指してリハビリを続けた。しかし、痛みが再発して受けた9回目の手術の末、医師から「前十字靭帯5度目の断裂で、もうプレーはできない」と宣告され、2019年1月に引退を発表した。

導き出した決断

現役を引退後、INAC神戸のフロント入りを決めるまでは深い葛藤があった。

「サッカー界を離れたら物事の見方が変わるかなと思いましたし、もうプレーできないからこそ、サッカーを見るのが辛くて苦しくて、シャットアウトして生きる道も考えました。ただ、このままではサッカーに思いを残したまま一生後悔して終わるだろうなとも思ったんです。そこで思い浮かんだのが裏方の仕事です。イベントやホームゲームの運営をお手伝いしたときに自分が知らなかった世界に衝撃を受け、こんなにも多くの人に支えられてサッカーができていたのだと実感しました。クラブからもお仕事の話をいただく中で、INAC神戸を裏から支えることが、たとえ苦しくてもこの現実を受け入れて自分と向き合える一番の道と思い、決断しました」

竹村さんは現在、ファンクラブの運営や試合の視察、営業活動をしながら、選手とクラブのつなぎ役になりたいと考えている。

「自分にしかできない仕事があるのではないかと感じつつ、今はそれを模索しているところです。安本（卓史）社長からは『なんでも屋になれ』と言われています。そうなれたら最強だと思いますが、そのためにはもっとこの世界のことを学ばなければいけません。そうやって積み重ねていった先に、本当にやりたいことを見つけたらと思っています。私自身、敷かれたレー

ルの上を走るのではなく、『こんなセカンドキャリアもある』と示していきたい。どんな選択をしても、その選択が正解か不正解かを決めるのは自分。そして、その選択を決断したことに対して自分で責任を持つことが大切だと思います」

けがや痛みとの付き合い方、プレーできない悔しさや辛さ、プレーできることの喜び、仲間の大切さ、支えてくれている人たちへの感謝。竹村さんはサッカーを通じて学んだことを、今度は違う立場から還元していこうとしている。



東京都のサッカーをグラスルーツから支える

グラスルーツからトップレベルまで

東京都サッカー協会の職員として、都内で開催されるキッズフェスティバルなどの普及事業を担当し、さまざまなカテゴリーで試合運営にも携わる中山千恵美さん。中山さんが本格的にサッカーを始めたのは高校生のとき。小学校の体育でサッカーを経験し、どこかでサッカーをしたいと考えていたが、当時は女子チームがほとんどなく、中学でも女子のサッカー部はなかった。そんなとき、サッカー雑誌で渋谷区を拠点とする「SOCIOS.FC（ソシオス）」が選手を募集しているのを見つけて加入した。

「ちょうどチームが立ち上がる時期でした。当時、東京ではFCジンナンや三菱養和レディースなどの6チームでチキンフットボールリーグというリーグ戦をしていたのですが、他のチームが入ることはできなかったんです。それでSOCIOSはいったん神奈川県でチーム登録して活動し、その後、東京都女子リーグに加盟しました」

現在、東京都女子1部リーグからなでしこリーグ入りを目指しているSOCIOSは、FC PAFと並ぶ女子チームの草分け的存在だ。中山さんは選手としてプレーしながら、必要に応じて裏方の仕事もこなすため、指導者や審判員の資格を取得していた。

「チームに帯同審判員（チームに同行する審判員資格を持った者）がいなかったため、3級審判員の資格を取りました。監督が定着しない時期があったので指導者の資格も取るようになって、今はB級コーチライセンスを持っています」

好きなことを仕事に

そのうち、中山さんは東京都トレセンで女子選手の指導を任されるようになった。同時に生活のウェイトは一気にサッカーに傾いていく。

「もともと社会人になってからは幼稚園の先生をやっている選手を続けていたのですが、幼稚園の仕事を辞めた後にサッカー教室を運営していた一般企業に

就職しました。それからは、サッカー活動を優先させてもらいながら仕事と両立し、土日はトレセンをこなすというハードな毎日でした。人は好きなことを仕事にする人、しない人に分かれると思います。当時の私は忙しすぎて、いっそのことサッカーを仕事にした方がいいのではないかと考えていて、そんなときに縁あって東京都サッカー協会から声をかけてもらったんです」

2002年から2007年まで担当していたU-12女子トレセンでは、後になでしこジャパンに選出される岩渕真奈や横山久美らもあり、多くの選手たちを指導した。

「教えていた選手たちと再会できたときはすごくうれしいですね。最初は『中山コーチ!』と寄ってきてくれるのですが、そのあとで『あの時は怖かったです』と言われて(笑)。確かに私の指導は厳しかったと思います。選手たちのその後の成長は楽しみの一つです」

いつまでもサッカーの現場で

好きなサッカーを仕事にし、指導者、審判員、運営とさまざまな面からサッカーに関わり続けてきた中山さ



ん。東京都協会が主管するJFA主催大会も運営面から支え、日本サッカーの根幹となるグラスルーツの推進にも尽力する。

「女子のカテゴリーは、東京都協会の中でも一番詳しいということで、都内で開催されている皇后杯やなでしこリーグカップなどの大会運営に関わることは多いです。あとは幼稚園で先生をしていた経験があってサッカーも教えられるからと、スタッフが足りないときは臨時でキッズ巡回指導に出ることもあります。子どもたちからは逆にパワーをもらえるので楽しいですよ」

SOCIOSの現場に足を運ぶことは少なくなりましたが、現在は“代表”という立場でチームを支え、その歴史をつないでいる。中山さんは、選手たちが現役を引退後も何らかの形でサッカーに関わり続けてくれることを願っている。そのためのバックアップは惜しまないつもりだ。「選手たちが指導者の道に進もうとするときには手助けができればいいなと思っています。たとえば、SOCIOSと一緒に指導しながら指導者としてステップアップしてくれたらいいなと考えることもあります。選手たちとは、いつまでもサッカーの現場で会えたらうれしいですね」

北海道からなでしこの花を咲かせたい

サッカーとの出会い

北海道サッカー協会の副会長と女子委員長を兼任している鷺津裕美さん。以前は北海道高等盲学校に体育教員として勤めていた。

「北海道で『はまなす国体』があった1989年、私は教員歴がまだ浅かったのですが、学校では国体に向けてサッカー競技の成年男子の部に出場するための準備をしていて、私もお手伝いをしていました。そこで監督として選手を指導されていたのが、今の北海道協会の会長である鈴木重男さんでした」

自身がサッカーをプレーするようになったのも同時期、鷺津さんが26歳のときだった。同じグラウンドで全国大会を目指してトレーニングしていた「モルテンはばたけ(現、HABATAKE)」という女子チームから声をかけられた。

「私はそれまでずっと陸上競技をしていてサッカーとは無縁でした。『サッカーをやってみませんか?』と誘われて、面白そうだなと思い、まずは練習試合を見学しに



行ったんです。そこで急きょ試合に出ることになり、得点を決めました。テクニックはなかったのですが、『できるかもしれない』と思い、そこから夢中になっていきました」

チームに入ってから3週間の練習に参加し、週末は試合をする日々を送った。オーナーが引退した後は代わってチームの運営も任されるようになり、体育教員を続けながら、選手兼チームオーナーとして10年以上現場に携わった。その後、新たな転機が訪れる。

葛藤と三つのやりがい

「2002年のFIFAワールドカップ日韓大会が終わった後、北海道協会を発展させるための新たなプロジェクトが立ち上がりました。組織として女性役員を登用することになり、国体の頃からの鈴木会長との縁もあり、私の名前が挙がったそうです。社会貢献の面で役に立てばと思い、引き受けることを決断しました」

2006年、北海道協会の女子委員長に就任。現在は副会長も兼任する。鷺津さんにとって、北海道サッカーや女子サッカーに対して同じ思いを持つ人たちの出会いは、仕事の醍醐味のひとつという。

「女子委員長になった頃はなでしこジャパンの知名度はまだ低くて、他都府県の役員の方々と『なでしこジャパンが有名になったらいいよね。そうしたら女子サッカーをもっと普及させられる』と話していたんです。皆さんの意識はとても高くポジティブで、女子サッカーを普及させたいという意欲にあふれていました。そういう方々との出会いは印象的でした」

なでしこジャパンが2011年のFIFA女子ワールドカップで優勝し、女子サッカーが国内でも広く認知されるようになり、道内では地元出身の熊谷紗希や高瀬愛実、三宅史織ら代表選手の活躍にも注目が集まるようになった。「今後は彼女たちのように世界で活躍できる選手



をもっと育てていきたい」と鷺津さん。盲学校で体育教師の仕事を続けながら、北海道協会の仕事、さらには育児と三足のわらじを履いて奔走してきた。限られた時間の中で葛藤したこともあった。

「一人で2つ、3つの仕事をする中では時間に限界があるので、中途半端にしかできないことに自己嫌悪に陥ることもありました。でも、それぞれにかける情熱は三等分じゃないと考えるようにして、目の前の仕事に出来る限りの力を発揮していこうと前向きに捉えていました。子育ては時間とともに要領も良くなり、家族の支えにも感謝しています」

大変なことは多いが、その分、喜びも数倍になって返ってくる。

「体育教師として、子どもたちの成長は本当にうれしいことです。頑張って何かができるようになると目に見えて変わり、成長を感じられます」

女子委員長として、北海道の女子サッカーの普及に尽力してきた。これからも地域に少しずつでも女子サッカーを根付かせていきたいと考えている。

「ずっとサッカーに関わってきたので、今後もできる限り継続して関わっていきたくと思っています。今後、女子のプロ化も進めていく中で女子サッカーの環境を整え、継続させていくこと。なでしこジャパンには世界のトップでいてほしいと思っているので、私も自分ができることをして、その中で北海道から代表選手が育っていつてくれることを願っています」

- ・カヌーポロ指導者
- ・筑波大学女子サッカー部創設者

大学女子サッカーとカヌーポロの歴史を築く



ないところから生み出す行動力

筑波大学女子サッカー部の創設者の一人で、関東大学女子サッカーリーグの立ち上げに関わり、カヌーポロ（※1）の指導者として年代別代表チームを率いるなど、異色の経歴を持つ八鍬美由紀さん。サッカーが盛んなさいたま市出身の八鍬さんにとって、サッカーは身近な存在だった。

「宇宙飛行士になりたくて筑波大学の工学部に入りました。スポーツが盛んな大学で、そこで本格的にサッカーをやりたいと思いました。寮で部屋が隣だった小林美由紀さんを誘って探してみると女子サッカー部がなく、しかも、『女がサッカーをやるの?』と言われたんです。できないと言われるとやりたくなる（笑）。それで小林さんと一緒にいろいろな学部から人を集めて女子サッカーチームを創りました」

茨城県には女子サッカーチームがなかったため、当時は地元で集まってサッカーをしていたママさんたちと試合をしていた。関東圏に大学女子サッカー部が増え始めると、関東大学女子サッカーリーグを6チームで創設し、学生主体で全国大会（全日本大学女子サッカー

選手権大会の前身）も立ち上げた。

「まずは自分たちでリーグ戦を開催するために関東大学女子サッカー連盟を立ち上げようと動き出し、男子の関東大学連盟に相談して規約などを作りました。当時の男子学連の方々にはいろいろと助言やご協力をいただき、本当に感謝しています。そのうち、兵庫教育大学の先生から『関西でも同じ動きがあるから、関東と関西で一緒にやろう』と話をいただき、それが全国大会につながっていきました。ただ、そのときも『女がサッカー?』という声は聞こえてきました。『全日本』という言葉大会名に使うにはJFAの許可も必要だったので、全国大会という名目で大会を継続して行く中でJFAに認められ、5年後に今もある全日本大学女子サッカー選手権大会になりました」

「水上の格闘技」カヌーポロへの転向

大学卒業後はFC PAF（当時は東京都女子サッカーリーグ1部）でサッカーを続けた。転機は思いがけず訪れる。

「週2、3回は夜間練習をして土日は試合、それ以外の日はジムに通う生活をしていたら、スキー場で膝の靭帯を切ってしまったんです。リハビリのため足を使わないスポーツをしようと考え、もともとアウトドアが好きだったこともあって秩父でカヌーを漕ぐようになりました。そうしたらある日、『国体に出る予定だった選手が出られなくなったから、代わりにスラローム（※2）の予選に出てほしい』と言われて引き受けたら、関東予選を通過してしまっ。そこから本格的に競技を始めました」

八鍬さんはスラロームで国体に7回出場。その競技の面白さにはまっていった。カヌーにはさまざまな種目があり、そのうちカヌーポロという球技と掛け合わせた種目があることを知った。

「『サッカーをしていたなら興味があるんじゃない?』と言われて、2004年に日本で開催された世界選手権を見に行ったら面白くて、翌年には、カナダで開催されていたカヌーポロの“草大会”に友人を誘って出場しました」

選手から指導者へ

カヌーポロはオリンピック種目ではないため、代表選手でも仕事と競技を両立しており、海外遠征も全て自費。指導者も手弁当で活動している。そんな中、八鍬さんも代表の活動に加わるようになった。

「2006年のアジア選手権に初めて女子代表のチームスタッフとして帯同しました。男子も雑務をする人がいなかったため両方を兼任するようになり、結果的には男子チームのコーチになりました」

大学院に再入学して球技のコーチングを学び直し、指導者としての知識や手腕も磨き、U-21男子代表の監督も任されるようになった。浦和レッズサポーターで、海外サッカーも見る八鍬さんは、サッカーの戦術をカヌーポロの指導にも生かしている。

「私がカヌーポロの指導を始めたのは、ちょうどグアルディオラ監督がFCバルセロナの監督になった頃で、試合をよく見ていました。サッカーは世界で最も戦術が研究されている競技です。たとえば、スペイン代表のサッカーとカヌーポロ代表の戦術は似ていて、それはドイツやイギリスも同じ。当時、カヌーポロでパスをつなぐ戦術は主流ではなかったのですが、チームに取り入れたらユース年代でうまくいきました」

2019年にはサッカーC級コーチライセンスも取得。現在は、カヌーポロと仕事を両立させる多忙な日々を送る。「老後は浦和レッズの試合をホーム、アウェイ全て見に行きたい」と話す八鍬さん。サッカーへの情熱とともに、カヌーポロの指導者として挑戦は続く。

プロ選手から国家公務員、そして研究者へ

目指し続けた日本代表

野口亜弥さんは3歳でサッカーを始め、日本、アメリカ、スウェーデンでプレーした後、26歳で現役を引退した。引退後、異色のキャリアを築いてきたその人生の岐路には、いつもサッカーがあった。

「中学まで男子と一緒にプレーしていました。女子は男子チームで試合に出られなかったのが、茨城のつくばFCレディースでも活動しながら、週1で浦和のスクールに、長期の休みは東京の日テレ・メニーナに練習生として参加していました」

つくばFCの活動を通して出会った筑波大学の先輩たちに憧れた野口さんは、東京の十文字高校に進学して文武両道に励み、目標だった筑波大に一般入試で合格し、女子サッカー部に入った。

「最初に教わったコーチから『女子はプロもないし、サッカーだけで食べていくのは難しいよ』と言われ、常に先のことを考えるようになりました。小6でメニーナのセレクションを受けて、合格できる実力はあるけど家が遠いからチームに入ることは難しいと言われました。両親は東京に引っ越してもいいよ、と言ってくれましたが、家族を巻き込むのではなく、今ある環境で頑張ることに決めました」

代表を目指していた野口さん。十文字高校を選んだのもユース代表を目指していたからだった。

「メニーナで同年代だった永里優季選手が代表で活躍する姿を見たときは悔しかったです。思い通りにならないことを環境のせいにしていた時期もあり、大学1年生の時に『女子サッカー部を辞めて、代表を目指すためになでしこリーグに挑戦したい』と、つくばFCを紹介してくださった小林美由紀さんに相談したら『自分の決断に責任を持て』と言われました。小林さんに

紹介されたアメリカの女子サッカーツアーに参加し、そこで『サッカーの楽しさ』をもう一度思い出すことができました」

卒業後は、アスリート奨学金を利用してアメリカの大学に留学。サッカーをしながら語学を磨き、MBA（経営学修士）を取得した。キャリアの選択肢を広げる一方、代表入りを諦め切れなかった。

「海外で活躍することでしか代表への道は開けないと思い、2013年、アメリカのコーチの紹介で、イングランドのチェルシーが来日した大会に参加させていただきました。そのときに永里選手と再会しているいろいろな話をしました。そこで自分が選んだ道も間違いではなかったと思えたことがターニングポイントでした」

野口さんはその大会で知り合ったエージェントの紹介で、スウェーデンのリンショーピングFCとプロ契約を結んだ。4カ月プレーした後、引退を決断。理由は三つある。

「選手として結果を残せなかった時点で代表の可能性がなくなったこと、自分のサッカーキャリアで一番高いところでやめようと思ったこと、そして、やりたいことを見つけたからです。アメリカにいたときに、貧困

地域でスポーツを通じて社会問題の解決を図る活動があるのを知って興味を持ちました」

自身の運命を切り拓く

ザンビアのNGO団体に所属して約半年間、スポーツを通じた国際開発、ジェンダー平等社会の実現などをテーマに活動した。現地では子どもたちにサッカーも教えた。

「ザンビアでは、現地の人たちの価値観や貧困などの社会問題がなぜ起きているのかを学び、自分事として問題を捉えられるようになり、価値観が大きく変わりました。もっと関わりたいと思うようになったんです。私の場合、サッカーから考えられたことで、開発途上国や社会課題をより身近に感じられたのだと思います」

活動を終えて帰国した野口さんは、スポーツ庁に約2年半勤め、現在は順天堂大学でスポーツ健康科学部の助教を務めている。

「スポーツ庁では、ザンビアで取り組んでいたようなことを政策として関わらせてもらいました。ただ、私はザンビアで経験したことを日本でも実践したいと思いましたが、研究の蓄積や実際に動ける場所や団体がないことに気づきました。新しい分野だからこそ、誰もやる人がいないのなら自分で開拓しようと思ったんです」

スポーツの価値を正しく広めていくため、新たな分野に挑戦する道を選んだ。

「今は35歳までに専門家としての土台を固めていくことを目標としています。その一つが博士号を取ることです。スポーツと開発の分野はまだまだ新しい分野です。スポーツを通じて国際課題を身近に感じ、自分事として考えられるきっかけを多くつくっていきたいです。日本におけるこの分野の発展の一助になれるように力をつけていきたいです」



選手、サポーター、そしてマーケティングの立場から

ゴール裏から見た景色

2020東京オリンピック・パラリンピックのマーケティングを一手に担う広告代理店の電通で国際サッカー部に所属し、さまざまなプロジェクトに携わる中倉あかねさん。サッカーに魅了されたきっかけは、小学3年生のときに見に行った地元の大宮アルディージャの試合だった。

「当時の大宮公園競技場は小さくてアットホームな雰囲気でした。子どもだからとゴール裏の一番前で見せてもらって、すごくキラキラした世界でした。ピッチ上で戦う選手がかっこ良くて、『あんな風になりたい』と憧れを抱き、弟と一緒にサッカーを始めたんです」

サッカーが盛んな土地柄だけに、小学校の体育でボールを止める・蹴るといった基礎技術はしっかりと教わり、中学校では男子サッカー部で紅一点、サイドバックとしてプレーした。対戦チームから「相手のサイドバックを狙え」と標的にされたり、女子更衣室がないなどの苦勞も経験した。

「高校は、市立浦和高校女子サッカー部でサッカーを続けました。ちょうど2011年のFIFA女子ワールドカップでなしこジャパンが優勝し、県内の高校でも女子サッカー部が増えていきました。海外留学をしたかったので大学は上智大学に進みましたが、女子サッカー部がなくサッカーは続けられませんでした」

した」

ピッチに立つ機会はなくなったが、大宮サポーターとしてスタジアムには通い続けた。

「ゴール裏には立ち続けています。ホームゲームに行かないと違和感があるんです」

広告とサッカー

大学でドイツ語を学び、ドイツに留学。その際に、イベントプロモーションなど広告関連の仕事に興味を持った。一方、サッカーに携わる仕事がしたいとも思っていたという。

「選手のときから『女子サッカーをもっと活性化させたい』と考えていました。高校の監督に田口禎則さん(元なでしこリーグ専務理事)を紹介してもらってお話を伺うと、サッカーに関わる仕事にはいろいろあり、そこに広告代理店での仕事もあると聞いて広告とサッカーがつながりました」

その後、中倉さんは電通に入社。145人の新卒採用者のうちスポーツ採用枠は5人という狭き門を突破した。面接では、東京オリンピックをテーマにアピールす

る志望者が多いと考え、広告の話題に重点を置いてアピールした。「いろいろな競技がある中でサッカーの部署に配属されたことは本当に運が良かったと思う」と中倉さん。現在は、2021年に予定されている女子プロリーグ新設にも関わっている。

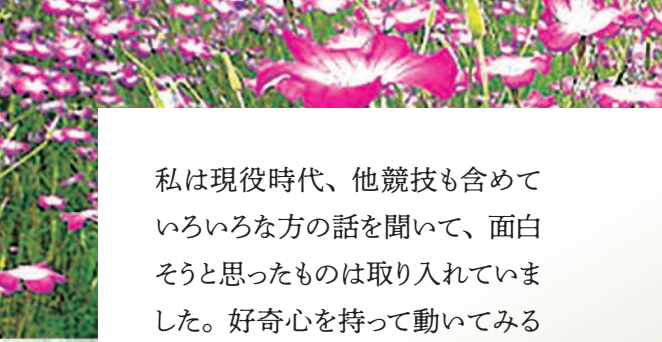
「今は国際サッカー部という部署で、各国のサッカー連盟・協会、リーグ、クラブのスポンサーシップセールスを担当しています。女子サッカーとは直接的な関わりがなかったのですが、JFAさんから女子プロリーグや2023年女子ワールドカップ招致の話をいただいたとき、社内で『女子サッカー経験者に任せた方がよいものができるだろう』という意見があり、私が入らせてもらうことになりました。私にとっては幸運に幸運が重なっています」

ステップアップを見据えて

選手、サポーター、そして広告代理店とさまざまな立場でサッカーに携わってきた中倉さん。いくつかの選択肢を持って自身の今後を見つめている。

「多くの女の子たちがサッカーをできる環境づくりに貢献したいという個人的な思いにおいては、実現に一步近づけたと思います。ただ、代理店の立場では、何を考えるにしてもまずはマーケティングの視点が必要で、ジレンマがあったりもするんです。新しくできる女子プロリーグ、2023年女子ワールドカップにもぜひ関わりたいと思っています。ただ、会社の方針もありますし、自分のステップアップのために一度サッカーから離れて戦略やマーケティングを学ぶ時間も必要かもしれないと考えています。もう一つの夢は、大宮アルディージャを強くすること。クラブのサポーターには、『仕事ではクラブに関わりたくない』と思われる方もいると思いますが、私はむしろクラブの中に入って自分にできることをすべてしたいと思うんです」





私は現役時代、他競技も含めていろいろな方の話を聞いて、面白そうと思ったものは取り入れていました。好奇心を持って動いてみる中でやりたいことを探すのもいいですね。サッカー選手としてプレーしていたキャリアは貴重ですから、それを生かすこともできると思います。

—— 高倉麻子



未来へのエール

私は引退時にセカンドキャリアのことを考えていませんでした。現役時代に指導者ライセンスを取得しておくとかサッカー理解も深まりますし、指導者の道も探ることができると思います。女性のGK指導者はまだ少ないので貴重な人材です。いろいろなところに活躍の場があると思いますよ。

—— 轟奈都子

現役中はサッカーに集中することが大切だと思います。でも、引退後の人生の方が長いので、現役のうちにサッカー以外のことにも興味を持って自分の世界を広げておくといいと思います。私はその大切さを引退後に知ったので、現役のときにいろいろな分野の友達と接することもいいですね。

—— 河本菜穂子

私はこれまで人とのつながりの中で自分が進む先を決めてきましたから、人との縁はとても大切だと感じます。何が自分に向いているかはやってみないと分からないですし、迷ったり悩んでいるだけでは答えは出ないので、興味があることにはどんどんチャレンジしてほしいですね。

—— 宮本ともみ

スペインでは、18歳で成人したら家を出て自立しなければいけないという考え方があり、大学で学んだことがその後の職業に直結するので成人する時点で何を学ぶかが明確です。日本は大学で何を学んでも、その後の選択肢は幾通りもあります。器用だからこそ、何にでもなれるのが日本の良さだと思いますから、その中で自分が幸せや充実感を得られるものを探してみるのもいいのではないのでしょうか。

—— 佐伯夕利子

先のことは今も常に不安です。ただ、そうやって不安に思うことが行動を起こすための一番の原動力にもなっています。不安に思ったら行動しますから。私の場合、金銭面の不安より、組織の中で自分のやりたいことができないことへの窮屈さがあったので、自分でチームを立ち上げました。今は自分のやりたいことをできているので心は充実しています。

—— 藤田安澄

私は高校の時から教師の道しか考えていませんでした。大学で教員免許を取ったので仕事は見つけやすかったです。教員の資格を持っていると選択肢は広がるので、取得できる方はしておくといいですよ。それから、人とのつながりを大切にしておく、困った時に助けてもらえると思います。

—— 池野伶奈

審判員はトップレベルでサッカーに関わり続けられます。審判員というものにも興味・関心を持ってチャレンジしてもらいたいです。けがから復帰を目指す選手のリハビリなどにもお勧めです。主審は試合の中にいるので、試合勘を早く取り戻すことができ、競技復帰に役立つと思います。また、海外では代表経験選手が引退後に審判員をするケースもあります。

—— 吉澤久恵

選手でいられる時間は特別なものなので、可能な限り現役選手で居続けてほしいです。セカンドキャリアとして指導者はイメージしやすいと思いますが、私のようにチームを支える仕事もあります。仕事の内容は多岐にわたりますがさまざまな方々との出会いもあり、やりがいのある仕事です。

—— 山本りさ

私の場合、新しいことに抵抗はないので「やってみよう」と思ったことはとことんやります。慣れたコミュニティの外に出たくないというメンタルバリアを持っている選手は多いように感じますが、サッカー選手だからこそ会える人もあるので、現役中に選手であることを上手に活用できるといいですね。「なでしこケア」の活動がそのきっかけになればと思っています。

—— 大滝麻未

現役中に指導者や審判員の資格を取得したり、サッカー以外のことにも興味を持ちながら環境を整えておいて、いざという時に生かせるようにしておくといいと思います。ラグビー日本代表の福岡堅樹選手のように引退後に医師になることを目指している方もいますし、トップレベルでプレーをしながら引退後に専門職を目指すのもいいかもしれません。

—— 鈴木朱美

サッカーは勝負事ですから、不確定要素も多いものです。そこに魅力を感じたら、サッカーの仕事もきっと面白いと思いますよ。やってみて違うと思ったら、また違うことにチャレンジすればいい。サッカーの世界では周りの人たちがみんなサポートしてくれますから、怖がらずにぜひ飛び込んでみてください。

—— 江川純子

舞台に立つ人がいて、それを支える人がいて、観客がいたら、私は支える側になりたいと思いました。裏方の仕事に魅力を感じて、いろいろな方に話を聞く中で道が開けていきました。

—— 風間理佐

サッカー選手としてプレーできるうちはそこに全力で向き合うことで次のステップが見つかるのではないかと思います。チャンスを広げるためにも現役時代の過ごし方が大切だと思います。選手に個性があるように得意分野も人それぞれですから、人と比べず、一つ一つに丁寧に向き合うことで閃くものがあるかもしれません。

—— 北本綾子

私は子どもたちと遊ぶことや教えることが好きだったので指導者ライセンスを取得しました。現役引退後は指導者としてクラブの監督を目指す道もあると思いますし、普及や育成においても現役時代の経験は十分に生かせると思いますよ。私は子どもたちからすごくパワーをもらっています。

—— 中山千恵美

サッカーをしてきたからこそ今の私があります。引退後のことは一切考えておらず、「自分はどうありたいか」を考えて過ごしていればセカンドキャリアはどうにでもできると思っていました。けがをしてサッカー以外の人とも関わる中で自分が知らなかった世界を知り、衝撃を受けました。また、たくさんの人を支えられて生きているのだとあらためて実感しました。感謝の気持ちを忘れないこと、たくさんの人と話すこと、そして話を聞くことはすごく大切なことだなと思います。

—— 竹村美咲

セカンドキャリアのことを考えつつも、サッカーができる環境にある「今」を充実させた方が良いのではないかと思います。その上で、選手をやめてもサッカーに関わり続けてほしいです。選手として培ったイメージやアイデアは貴重ですし、普及にも生かせると思います。北海道サッカー協会でも競技経験のある方がメンバーになってくれたら心強いですね。

—— 鷺津裕美

私の場合は仕事としてスポーツに関わる道はあえて選びませんでした。ずっとスポーツに関わり続けることができ良かったと思っています。今は「やりたいこと」と「やりたいこととの関わり方」の選択肢が広がっている、一つのことをとことん追求して取り組むスタイルもあっていいと思います。

—— 八鍬美由紀

私は常に次のキャリアを考えながらサッカーをしていたので不安はありませんでしたが、そのために代表に届かなかったかもしれないと思うことはあります。でも、後悔はありません。アメリカに留学していたときに「選手だから会ってくれる人がいるんだよ」と言われました。つまり、サッカー選手であることが人とつながる武器にもなる。選手のうちにいろいろな人に会って興味を広げてほしいなと思います。

—— 野口亜弥

私が今の仕事を選んだきっかけは、サッカーとの関わり方にはさまざまな形があると知ったことでした。スポーツに関わる仕事にはさまざまな切り口があり、それを知ることが一つのきっかけになります。キャリアを考えるタイミングは、自身の選択肢を一度大きく広げるいい機会です。選手の皆さんにとっては、セカンドキャリアについて考えようと思ったときが、そのタイミングなのではないでしょうか。

—— 中倉あかね

本誌制作チーム 座談会 ～編集後記に代えて～

※座談会は2020年5月26日にリモート収録しました



今井純子
JFA 女子委員会 委員長



手塚貴子
JFA 女子委員会 副委員長

■ 20人のキャリアを読んで 感じたこと

今井 この冊子を作ったのは、サッカーをやってきた人が、「競技をやめた後も長くスポーツやサッカーに関わり続けてほしい」と常々考えていたからです。引退後の道は指導者や審判員だけではないので、そのイメージも広げてほしかったんです。イングランドの『Kick off your career』という冊子を参考にしました。編集チームもこうしてサッカー経験者を集めて、企画が実現できてうれしいです。今回は20人でしたが、もっといろんな人を紹介したかったですね。皆さんはどうでしたか？

小林 私は人選から携わったのですが、確かに枠が足りなかったですね。さまざまなキャリアがあって、トップレベルで戦った人だけでなく、多様な層に支えられて今の女子サッカーがあります。今後も多くの人に関わりたいたいと思うきっかけになればうれしいです。

宮中 編集と構成に携わらせていただいて、20人20色で勉強になりました。皆さん、人との関わりやタイミングを逃さず、思い切ってト

ライされてきたんだなと思いました。やってみたいことを言葉にして周りに伝えることも大事ななと。私は将来に少し悩んでいた時に(小林)美由紀さんに捕まって「あんた何したいの？」と言われて(笑)。自分は何がやりたいんだろうと考えて、美由紀さんに「本を読んだり書くことが好きです」と話したのがきっかけで今の仕事に結びついたんです。自分のキャリアを振り返る機会にもなりました。

今井 私も美由紀さんに捕獲されました(笑)。そういう人は多いんじゃない？

手塚 さすがの吸引力だね！(笑)。

小林 人と会話する中で「こういう人いない？」と言われることが多いからかな(笑)。宮中はそのとき派遣で働きながらコピーライター養成講座に通っていて。雑談の中でサッカーが好きだと知って仕事を紹介したんです。(松原) 溪さんはどうでした？

松原 取材の中で、皆さんのキャリアを聞きながら一緒に追体験させてもらったのは貴重な経験でした。興味深いエピソードがたくさ

んあったので、文字数との戦いでした(笑)。中学生の頃、中山千恵美さんが代表を務めるSOCIOS.FCに所属していたので、取材で再会して当時の話ができたのはうれしかったです。

手塚 皆さん、前向きな考えや好奇心を持っていて、その思いがあるから仲間を増やしたり、相応しい仕事と出合えたりしているように感じました。そういう人はもっといるだろうと思うし、この冊子を通じて、また背中を押される人が出てきたらいいなと。

今井 私は高倉麻子監督や大部由美コーチ、宮本ともみコーチとキャリアについてよく話すのですが、皆も元々は指導者になると思っていなかったのに今はそれぞれ指導や育成を極めようとされているのが印象的です。だから、指導者になるつもりがなくてもライセンス取得にチャレンジしてみたり、審判をする機会があれば好奇心を持ってやってみると、新たな可能性が見えてくると思います。ためらわず、いろんな機会にトライしてほしいです。八鍬さんや鷲津裕美さんのように、仕事にはしないでサッカーと関わる形もありますね。

宮中 美由紀さんも最初はボランティアでやられていたんですね。サッカーを仕事にしてみようとしたか？

小林 私は、サッカーをするために、食いつないでいましたから。最初は、仕事にするほどの指導力や競技力もないし、迷いもありました。でも、フルタイムでサッカーに関わったからこそ、組織の仕事や大会に携わったり、いろいろなことができました。サッカーで食べていけることが当たり前ではないし、仕事を持ちながらボランティアでやっている人たちがいることを忘れないようにしています。女子サッカーはそういう人たちに支えられてきましたから。

今井 そうですね。だから今後、女子リーグのプロ化などを機に女子サッカーが産業として広がって、サッカーが仕事になることも大事なことです。女性はいろいろなステージがあると思いますが、例えば出産をしてお母さんになっても関わり続けてほしいですね。

手塚 選手たちに話を聞くと、スポーツ科学や戦術分析、栄養学や心理学などを勉強したいし、選手をやめてからも何らかの形で関わっ



小林美由紀

JFA女子委員会 委員/ジェフユナイテッド市原・千葉レディース マネージャー



松原溪

スポーツジャーナリスト



宮中亜季

株式会社ウォールニクス 社員

ていきたいという声があって。美由紀さんみたいに「これをやってみたら？」と、的確なアドバイスをしてあげられる人がいたらいいなと。「誰かに勧められて」という人も結構いますからね。

■現役選手やOGに期待すること

宮中 個人的には、現役選手でいるうちは今の環境を大切に、サッカーを思い切り楽しんでほしいですね。チームメートも離れてみるとかけがえない存在になると思います。私も大学時代のサッカー部のつながりからネットワークが広がりましたから。サッカーも仕事も「ゴール」ではなくて、なりたい自分になるための一つの手段だと思うので、いろいろなことに挑戦してほしいなと思います。

松原 私にとって仕事の醍醐味は現場取材することです。国内外の現場の空気感を味わうことで選ぶ言葉も変わります。選手の皆さんはそのピッチの中で戦ったからこそ生み出せる言葉があると思いますし、実際に今はSNSで発信する選手が増えた中で、非凡な感性とか豊かな表現力に驚かされることもありますね。そうした形でも自分が感じたことをどんどん表

現してほしいなと期待しています。

小林 選手は全てを捧げてパフォーマンスを高めることが第一ですが、多くの人に見られる存在だと自覚することも必要だと思います。SNSも含めているいろいろなことが表現できるのに自信がなかったり、個性が埋もれがちで「もっと自分を出していいのに」と思うことがあります。一つのことに打ち込んで達成することは大きな価値があることだし、そこに自信を持ってほしいですね。

手塚 私は、サッカーを始めたばかりの女の子からトップリーグで戦う女子選手全員に、向上心や前向きな気持ちを持ち続けてほしいと思います。うまくいかないことがあってもその気持ちさえあれば何回でもチャレンジできる。人生の中でプレーに専念できる期間はそんなに長くない。でもスポーツやサッカーに関わることは一生できます。選手としても、その先も、日本の女子サッカー発展のために歴史をつないでいてほしい。私もまだまだ頑張りますよ！ 仲間を増やしていきたいです。

小林 手塚のように代表だった選手たちが示

していくのは大切ですね。

今井 現役選手もOGも、女子サッカーが好きで大切であればこそ、良くしていくために皆が当事者と思って関わってほしいです。「女子サッカーを良くしたい」という動機を誰よりも強く持っているのは、やっていた人たちですから。

手塚 プロになったらサッカー選手であることの価値や幅がさらに広がる、という風に考えられるようになるといいですね。

今井 同感です。サッカーで出会った人や機会は財産だし、サッカーをしていることが社会とつながることだと思いますから。今後、プロ化によって女子サッカーを取り巻くさまざまな環境も変化していくと思います。その中で選手がいろいろなことを考え、行動し、人脈を積み重ねて、次のキャリアへの可能性を広げてほしいなと思います。また、そういったビジョンを持ってサッカーに取り組む選手が増えたらいいなと願っています。今回はありがとうございました。

PROFILE

小林美由紀(こばやし みゆき)/神奈川県逗子市出身。寮で隣になった八嶽美由紀(P8・26参照)と共に、筑波大学女子サッカークラブを設立。大学4年次に留学したアメリカの女子サッカーの繁栄ぶりに刺激を受け、日本でもサッカーを広げたいと関東大学女子サッカーリーグをつくる。以降、FIFA女子ワールドカップボランティア、JFA Women's Collegeインストラクター、AFCマッチコミッショナーなど、女子サッカー国内外のあらゆる場面に出演。さまざまな人材をサッカー界に引き込む。日本女子サッカー界の母(本人は「姉」と強調)。現在はジェフユナイテッド市原・千葉レディースマネージャー。

松原溪(まつばら けい)/東京都世田谷区出身。小学3年生のときにサッカーを始め、明正アマソネスFCに6年生まで所属。中学時代はSOCIOS.FCに所属した。大学卒業後はスカパー!やフジテレビなどで海外サッカーやJリーグ、女子サッカーの番組アシスタントやピッチリポーターを務めた。2006年からスポーツジャーナリストとして活動を始め、国内外の女子サッカーの現場を中心に取材している。

宮中亜季(みやなか あき)/富山県富山市出身。子どもの頃から父や小学校の同級生と遊びの延長線上でサッカーを楽しむ。中学時代はバレーボール部に所属し、高校は女子サッカー部のあった呉羽高校に進学して本格的にサッカーを始める。筑波大学女子サッカークラブでプレーを継続。大学卒業後は仕事を転々とした後、日本サッカー協会の機関誌『JFAnews』の制作業務などに携わる。株式会社ウォールニクスに勤務。



サッカー × キャリア × 未来 Your Life with Football

発行日 2020年7月8日

発行 公益財団法人 日本サッカー協会

〒113-8311 東京都文京区サッカー通り(本郷3-10-15) JFAハウス

TEL 050-2018-1990(代) FAX 03-3830-2005

URL <https://www.jfa.jp>

監修 公益財団法人 日本サッカー協会 女子委員会

執筆協力 松原溪

制作協力 株式会社ウォールニクス

●表紙および本誌内のクレジットの記載のない写真:©JFA、©JFA/PR、©J.LEAGUE、©Walnix、©松原溪、その他ご本人提供

※本誌の記事・写真・図表・ロゴマークなどの無断転用を禁じます。

※本誌に掲載されている所属・役職等は2020年5月時点のものです。